

前田 F1

—昭和55年度県営圃場整備事業
に伴なう発掘調査報告(1)—

1982

群馬県勢多郡柏川村教育委員会

はじめに

柏川村は、昭和54年度より県営土地改良事業に伴なう埋蔵文化財の発掘調査を行なっております。この発掘調査では、全く予想だにしなかったところから非常に貴重な先人の遺産が数多く発見されております。

今年度、昭和55年度は、古墳時代後期初頭の住居址群をはじめとして、県内でも珍しい弥生時代後期の「村」の発見など、柏川村の古代を考える上で大変重要な資料を私達に与えてくれました。このような遺跡、あるいは遺物の発見は、柏川村にもこんなに素晴らしいものがあるのかという郷土の再発見にもつながるものであります。

ここに昭和55年度の発掘調査の成果の一端を報告し、この冊子が柏川村の埋蔵文化財の保護と理解との一助になることを願います。

この調査の際に御協力いただいた関係各位に対し謝意を表し、序文といたします。

柏川村教育委員会

教育長 金井久雄

例　　言

1. 本書は昭和55年度県骨柏川地区土地改良事業に係る発掘調査中、田面遺跡群前田遺跡の発掘調査報告書である。なを、前田遺跡の略称はF1である。
2. 前田遺跡は、群馬県勢多郡柏川村大字西田面字前田78番地他に所在する。
3. この発掘調査は土地改良事業によって、遺跡が直接破壊を受ける部分について柏川村教育委員会が県農政部の委託を受けるとともに、昭和55年度文化財保護国庫補助金、県費補助金を受けて実施したものである。
4. 発掘調査は、昭和55年4月19日より8月11日まで行った。
5. 発掘調査は柏川村教育委員会社会教育係文化財担当の小島純一が担当した。本書の発掘写真、本文及び編集も小島が行った。
6. 遺物の実測は、鈴木幸子、吉沢てい子、松村まり子、田ノ倉武男が担当し、製図は、笠原嘉子、田島洋子、小島が行った。又、遺物写真については武田 勉による。
7. 本遺跡の資料は柏川村教育委員会の管理下に保管されている。
8. 遺物整理及び報告書作成協力者
小沢 富江、笠原 嘉子、杉山 秀宏、鈴木 幸子、武田 勉、田島 洋子、田野倉 武男、
中嶋 あぐり、長瀬 博モ、長瀬 久子、中野 ひろ子、長井 文明、浅木 邦子、吉沢てい子
松村 まり子、小池 雅典。
9. 発掘及び遺物整理において次の諸氏から御指導、御助言をいただいた。心より感謝いたします。
新井 房夫、飯田 陽一、井上 唯雄、内田 敏治、柏崎 敦子、坂爪 久純、櫻場 一寿、
能登 健、前原 豊、松村 佐喜次、柏川村土地改良区、柏川村第7工区土地改良役員一同。

凡 例

1. 各遺構の縮尺は $\frac{1}{50}$ を基本としている。ただし、カマドの平面図は $\frac{1}{50}$ である。
2. 各遺物の実測図及び写真の縮尺は $\frac{1}{50}$ である。
3. 遺構平面図におけるスクリントーンはカマド及び炉址を示したものである。
4. 土層断面図におけるスクリートーンは榛名二ツ岳火山灰—F A—及び浅間B軽石を示したものである。
5. 水系レベルは原則として各遺構毎に統一した。

本文目次

序 文	柏川村教育委員会教育長	金 井 久 雄
例 言		
凡 例		
本文目次		
付表目次		
挿図目次		
図版目次		
I 発掘調査の経緯		1
II 遺跡の位置と周辺の遺跡		4
III 発見された遺構と遺物		9
1) 第1号住居址		9
2) 第2号住居址		19
3) 第3号住居址		31
4) 第4号住居址		35
5) 第5号住居址		47
6) 第6号住居址		53
7) 第7号住居址		55
8) 第8号住居址		62
9) 第9号住居址		71
10) その他の造構と遺物		73
VI 前田遺跡調査の意義と問題点		76
1) 遺構について		76
2) 出土遺物について		77
ア 土師器		77
イ 土製品		78
3) まとめ		

付 表 目 次

第1表 発掘経過表	2
第2表 第1号住居址計測表	9
第3表 第2号住居址計測表	19
第4表 第3号住居址計測表	31
第5表 第4号住居址計測表	35
第6表 第5号住居址計測表	49
第7表 第6号住居址計測表	54
第8表 第7号住居址計測表	56
第9表 第8号住居址計測表	62
第10表 第9号住居址計測表	71

挿 図 目 次

第1図 土地改良事業と発掘調査	1
第2図 昭和55年度調査遺跡の位置	4
第3図 前田遺跡とその周辺のおもな遺跡	5
第4図 前田遺跡遺構配置図	6・7
第5図 第1号住居址実測図	11・12
第6図 第1号住居址の遺物分布	13・14
第7図 第1号住居址出土の土師器(1)	15
第8図 第1号住居址出土の土師器(2)	16
第9図 第1号住居址出土の土師器(3)	17
第10図 第1号住居址出土の土師器(4)	18
第11図 第1号住居址出土の砥石	18
第12図 第2号住居址カマド実測図	20
第13図 第2号住居址実測図	21・22
第14図 第2号住居址の遺物分布	25・26
第15図 第2号住居址出土の土師器(1)	27
第16図 第2号住居址出土の土師器(2)	28
第17図 第2号住居址出土の土師器(3)	29
第18図 第2号住居址出土の遺物	30

第19図 第3号住居址の物分布	32
第20図 第3号住居址出土の砥石	32
第21図 第3号住居址出土の土師器	32
第22図 第3号住居址実測図	33・34
第23図 第4号住居址カマド実測図	38
第24図 第4号住居址実測図	39・40
第25図 第4号住居址の遺物分布	41・42
第26図 第4号住居址出土の勾玉	43
第27図 第4号住居址出土の土師器(1)	44
第28図 第4号住居址出土の土師器(2)	45
第29図 第4号住居址出土の土師器(3)	46
第30図 第5号住居址実測図	48
第31図 第5号住居址カマド実測図	49
第32図 第5号住居址の遺物分布	50
第33図 第5号住居址出土の遺物	51
第34図 第5号住居址出土の筒形土製品	52
第35図 第5号住居址出土の石製品	52
第36図 第6号住居址実測図	53
第37図 第6号住居址の遺物分布	54
第38図 第6号住居址出土の土師器	54
第39図 第7号住居址実測図	55
第40図 第7号住居址の遺物分布	57・58
第41図 第7号住居址出土の土師器(1)	59
第42図 第7号住居址出土の土師器(2)	60
第43図 第8号住居址実測図	63
第44図 第8号住居址カマド実測図	64
第45図 第8号住居址出土の砥石	66
第46図 第8号住居址の遺物分布	67・68
第47図 第8号住居址出土の土師器(1)	69
第48図 第8号住居址出土の土師器(2)	70
第49図 第9号住居址実測図	71
第50図 第9号住居址出土の土師器	71

第51図 第9号住居址 遺物分布	72
第52図 1号溝と1号土塹実測図	73
第53図 2号土塹実測図	74
第54図 第2号土塹出土の縄文土器	74
第55図 前田遺跡表様の紡錘車	75
第56図 住居址の変遷	77
第57図 前田遺跡出土の遺構、土師器の分類	80・81

図 版 目 次

図版1 第1号住居址全景	9
図版2 第1号住居址の発掘	10
図版3 第2号住居址全景	19
図版4 第2号住居址の発掘 (1)	23
図版5 第2号住居址の発掘 (2)	24
図版6 第3号住居址全景	31
図版7 第4号住居址全景	35
図版8 第4号住居址の発掘	36
図版9 第4号住居址のカマド	37
図版10 第5号、6号、7号、8号、9号住居址全景	47
図版11 第5号住居址のカマド	49
図版12 第5号住居址の発掘	50
図版13 第7号住居址の発掘	56
図版14 第8号住居址全景	63
図版15 第8号住居址の発掘	65
図版16 1号溝と1号土塹	73
図版17 2号土塹の発掘	74
図版18 住居址出土の土師器 (1)	81
図版19 住居址出土の土師器 (2)	82
図版20 第1号住居址出土の土師器	83
図版21 第1号住居址出土の土師器	84
図版22 第2号住居址出土の土師器	85
図版23 第2号住居址出土の土師器	86

図版24 第3号住居址、第4号住居址出土の土師器	87
図版25 第4号住居址出土の土師器	88
図版26 第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址出土の土師器	89
図版27 第7号住居址出土の土師器	90
図版28 第8号住居址出土の土師器	91
図版29 第8号住居址、第9号住居址出土の土師器	92
図版30 第5号住居址出土の土製品	93
図版31 第5号住居址出土の土製品	94
図版32 前田遺跡出土の滑石製品及び土製品、砥石	95

I 発掘調査の経緯

柏川村は昭和53年度より、ほぼ全村にわたる県営圃場整備事業が実施されている。それに伴なって工事によって破壊されていく埋蔵文化財の緊急発掘調査が実施されてきている。本報告の昭和55年度はその2年目にある。

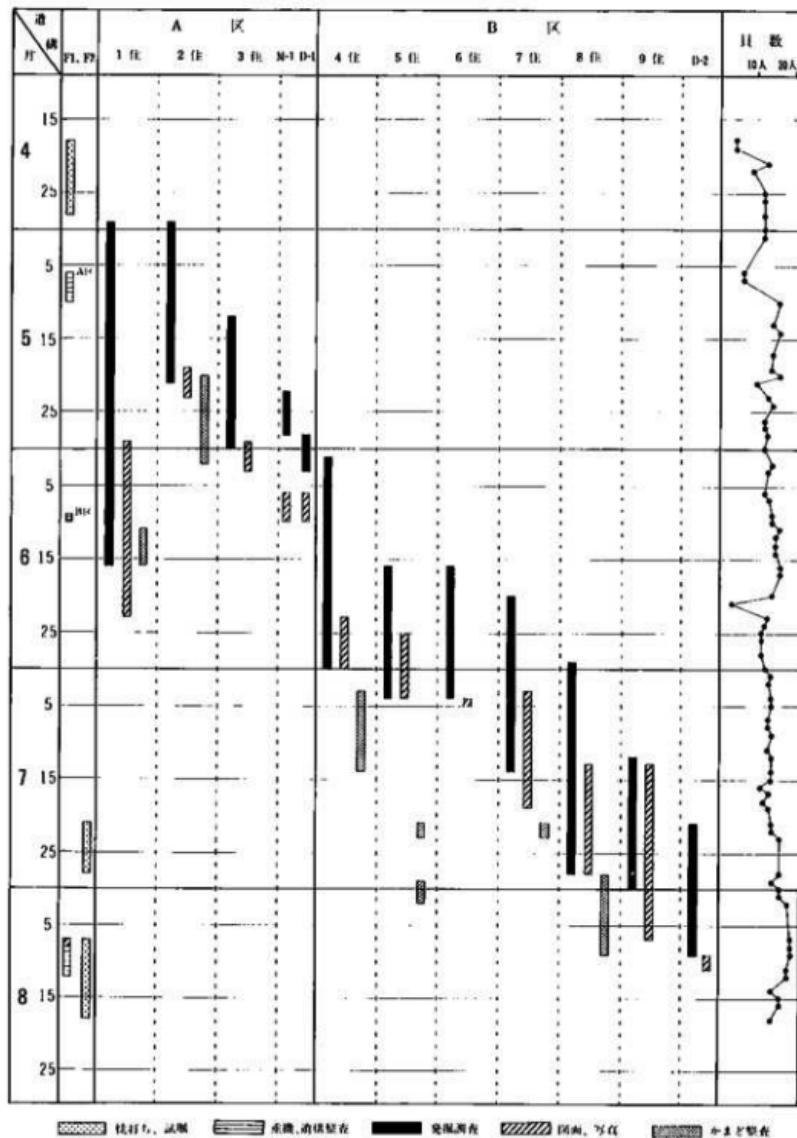
昭和54年度は発掘調査の開始時期がさまざまの理由により圃場整備の工事と同時着手という形をとった為、教育委員会は圃場整備工事の遅れを懸念する地元地権者と工事関係者との間に入り非常に苦悩を強いられたこととなつた。その為、昭和55年度はその轍を踏むことなく、年度当初からの圃場整備工事に先行する発掘調査を実施するという方針のもとに工事側との調整にあたつたのである。

当初、教育委員会では田面地区（第7工区）内に6か所の包蔵地を確認していたが、試掘あるいは重機による掘削時の立ち合いなどの結果から最終的に4か所の包蔵地について調査を実施することとなつた。しかし、この内の1か所、堤頭遺跡では、大巾な土量の移動が出て



第1図 土地改良事業と発掘調査

きたため当初の予定の倍近い面積の調査を余儀なくされた。又、昭和57年度工事着工予定地区であった月田地区（第2工区）内の月田古墳群についても、その対称面積の広さ、埋蔵文化財の豊富



第1表 発 症 経 過 表

さなどを考慮して1年先行の発掘調査という形で古墳3基について調査を行なうこととなった。

以上のような経緯で昭和55年4月22日付耕第126号で柏川村と群馬県との間で委託契約が結ばれ発掘調査が行なわれることとなった。発掘遺跡は5遺跡を数え、4月から前田遺跡、8月より一目市城址、10月より提頭、石切遺跡、2月より月田古墳群の発掘にそれぞれ着手することとした。発掘面積9900m²、それに古墳3基、延参加人員は5153人を数えた。

発掘調査は年度当初、4月1日からの着手予定であったが、発掘対照地が一面桑園であることなどから補賞問題等でかなり難行した。しかし、本報告の前田遺跡については速く地権者から理解が得られ、4月中旬より試掘に入ることができた。発掘対象は、この遺跡内を東西に横切ることとなる幅6m、長さ120mほどの道路敷を対象とした。

調査は試掘の段階で2か所の落ち込みが確認できたため、すぐに大型重機を導入し、全面表土剥ぎを行うこととなった。

この調査で確認できた遺構はいずれも掘り込みが深く、規模も大きく、又遺物の残りも非常に良好で、しかも出土量が豊富であったため、発掘調査はこれらの諸条件からかなりの労働量と時間を費やしてしまった。（第1表）

なお、発掘調査に関する事務局の組織は下記のとおりである。

金井久雄 教育委員会教育長

白石高士 教育委員会事務局長

坂本実 * 社会教育係長

武井修一 * 社会教育係主事

発掘調査の組織は下記のとおりである。

小島純一 教育委員会社会教育係、文化財担当主事

考古学専攻生

杉山秀宏 明治大学文学部学生 長井文明 奈良大学文学部学生

発掘参加者

新井政雄、小沢富江、笠原磯寿、笠原嘉子、金子金三郎、高橋昌志

立川誠三郎、中嶋あぐり、長瀬信吉、長瀬トモ、長瀬當子、中野ヒロ子

根岸利久、松村捷代、松村徳治、茂木芳子、

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

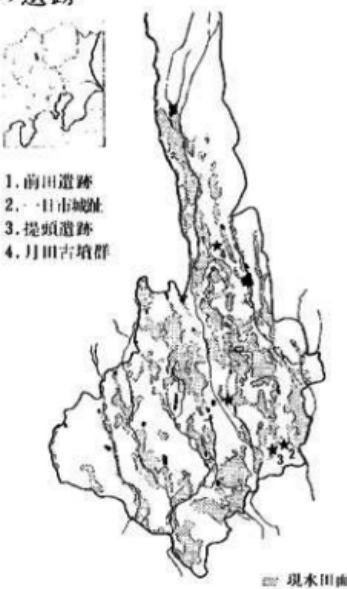
前田遺跡は、群馬県勢多郡柏川村大字西田面字前田78番地他に所在する。この遺跡は赤城山から南北にゆるやかに傾斜しながら延びてくる台地上の南端部に位置し、標高175m、現柏川からの比高差は約10mを計る地点にある。この台地は柏川の左岸にあたり、西は柏川に、南は柏川が東に大きく屈曲する部分まで比較的平緩地が続いている。東には小さな谷が入りこみ、この谷頭には湧水が存在している。この湧水のまわりには現在でもわずかに水田が作られている。(注1)

この前田遺跡をとりまく周辺の遺跡としては、前田遺跡の北方に小河川を挟んで隣接する役場遺跡が知られている。

(注2) この遺跡は現在、役場庁舎が新築されるなどではほぼ完全に消滅したものと考えられ、その内容については詳細に触ることはできないが、前田遺跡と同時期かやや時間的に下る遺跡である。この遺跡地には地元の古老の話によると、小円墳も数基存在していたらしく、現在でも柏川51号墳が残っている。又、東方には同じく小円墳である柏川69号墳も存在している。

この役場遺跡の他に、前田遺跡とはほぼ同時期と考えられる遺跡として、中町遺跡、一日市遺跡、白藤遺跡、渋沢遺跡などの遺跡が知られている。(第3図) これらの遺跡の内、一日市遺跡と白藤遺跡は前田遺跡よりやや古い時期の住居址を主体とする遺跡である。中町遺跡についてはすでにその出土遺物の一部が公表され、6世紀中葉頃の赤城山と柏川に対する信仰の場として把えられ、祭祀遺跡として性格付けられている。(尾崎 1958年)(注3) 公表された資料を見ると前田遺跡第1号住の出土遺物と同時期か、若干、古い様相をもったものとして把えられる。

柏川村には、古墳時代中期とされる土器(相模式土器)を出土する遺跡が非常に多く、古墳時代後期になると、遺跡数も減少し、そのかわりに後期古墳に位置付けられる小円墳が月田地区、深津地区、勝地区などに群集墳という形をとて出現してくるのである。前田遺跡はこの古墳時代後期前半を主体とする遺跡であり、上記のような柏川村における古墳時代のあり方を考える上で重要な位置を示めるものと考えられる。

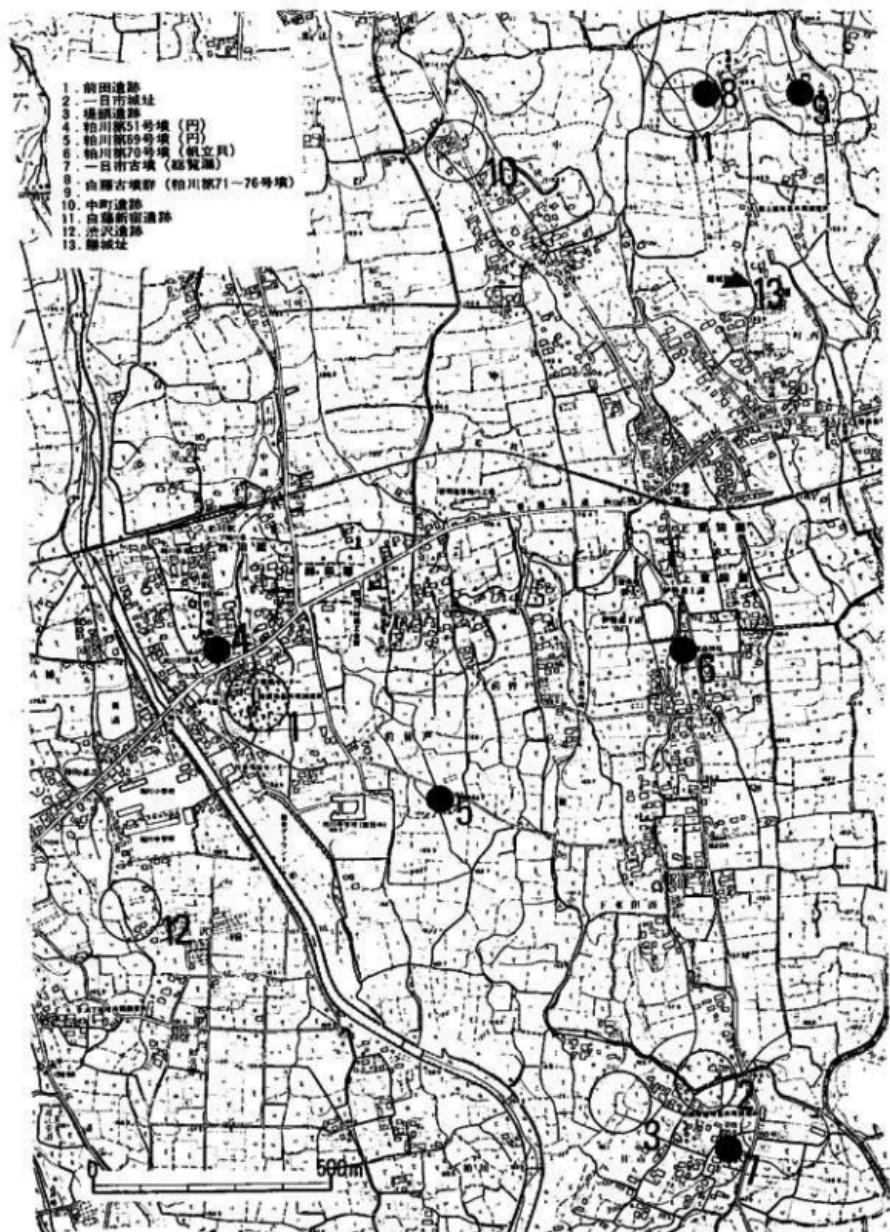


第2図 昭和55年度調査遺跡の位置

注1. この水田面については試験を行ったが古代の水田跡を検出することはできなかった。

注2. 井上 喜雄 「柏川村誌」 1972

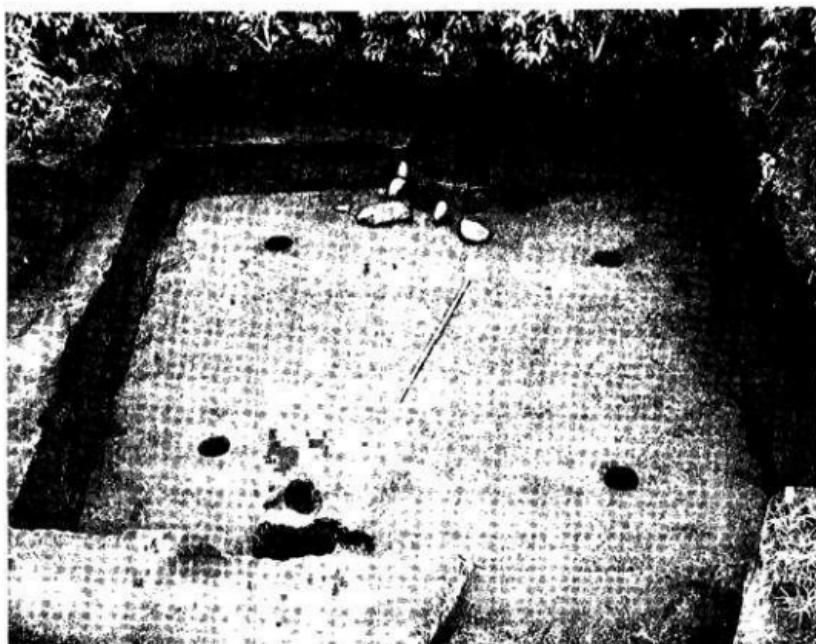
注3. 尾崎喜左雄 「群馬県勢多郡柏川村中出土の土器群」 日本考古学年報11. 1958



第3図 前田遺跡とその周邊のおもな遺跡

III 発見された遺構と遺物

1) 第1号住居址

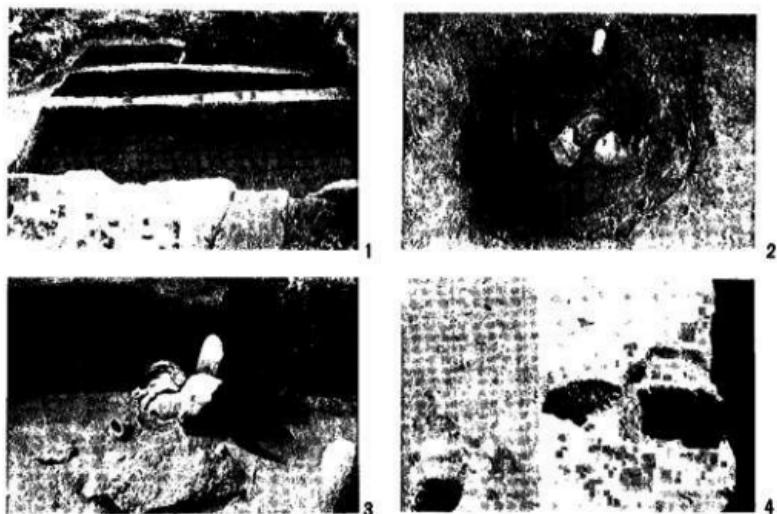


図版1 第1号住居址全景

第1号住居址は発掘区の東端に位置している。住居址の掘り込みは非常に深く、床は硬くしまっている。北壁にカマド状の遺構を持ち、その東側に貯蔵穴、さらに南壁面よりには南北に縦列する形で2個のPitを有する。又、住居中央には、炉を配する。主柱穴は4本、壁下には壁周溝が全周している。覆土上層には榛名二つ岳給源の火山灰層（FA層）が確認できた。

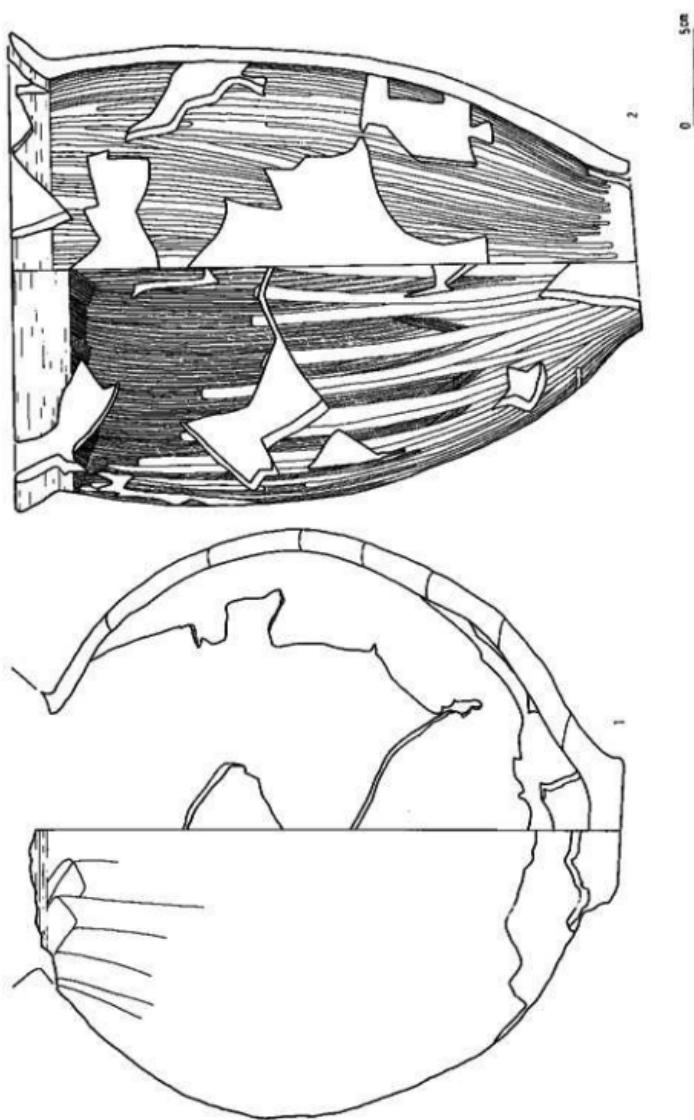
項目		項目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N-21°-W	主柱穴 P ₁	3.4	3.0	8.0
		# P ₂	3.6	2.7	7.3
東西方向の辺の長さ cm	640	# P ₃	3.0	2.5	8.6
		# P ₄	3.0	2.4	8.0
南北方向の辺の長さ cm	640	貯蔵穴 P ₅	5.3	5.2	4.8
		P ₆	6.2	6.0	2.6
壁高 cm	60	P ₇	3.4	3.0	1.2
		壁周溝	3.3	2.0	1.0

第2表 第1号住居址計測表

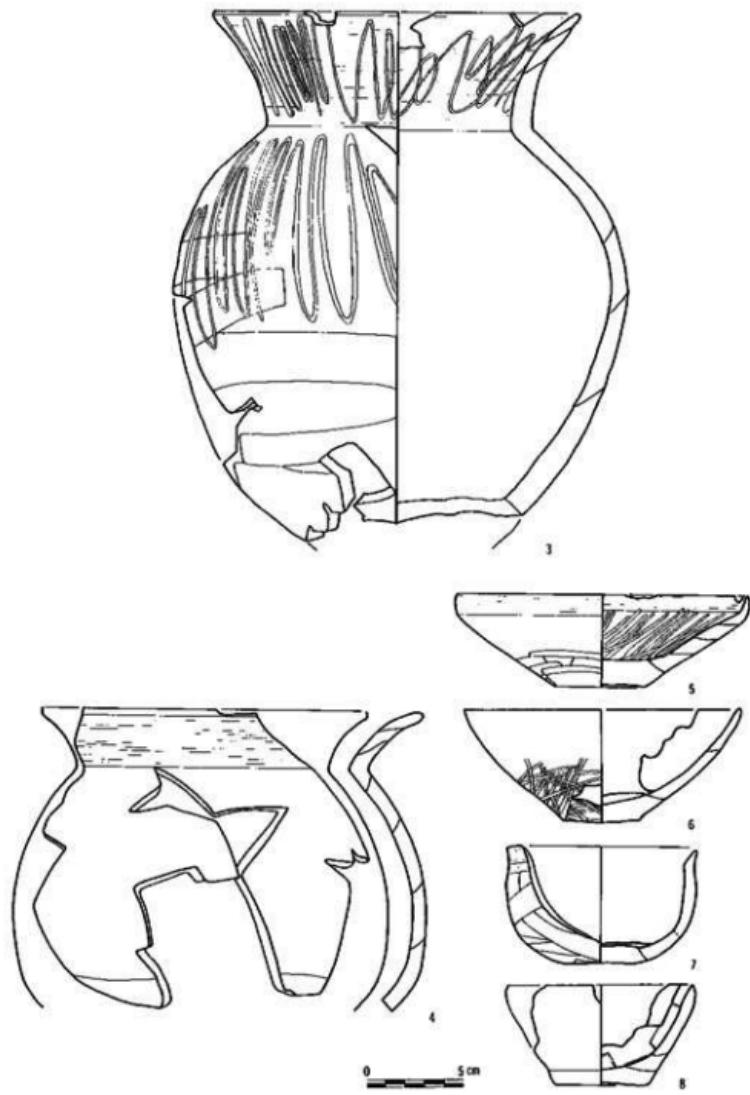


図版2 第1号住居址の発掘

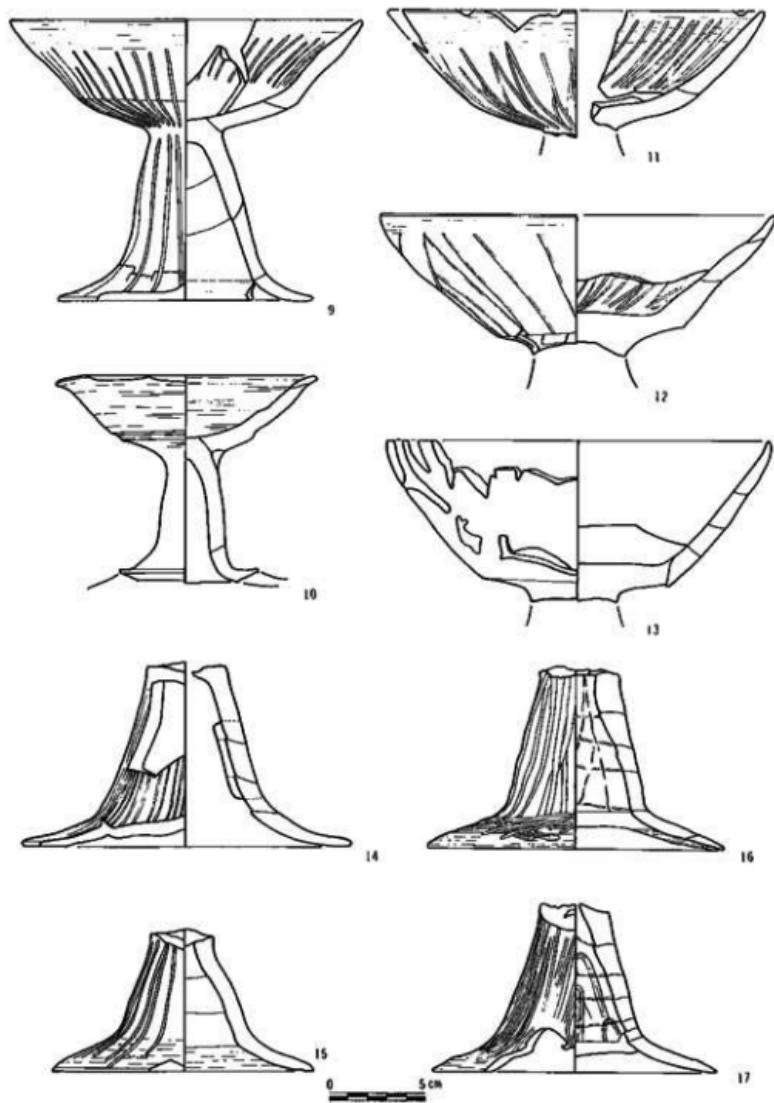
- (1) 第1号住居址の東西土層断面(南より)。住居址覆土は6層に分けられる。第1層は榛名二つ岳帽石(FP)と浅間C軽石を多量に含んだ層である。第2層は黄灰褐色土のサラサラした層であり、FP粒を多く含んでいる。第2層以下の層にはFP粒をまったく含まない。この第2層が榛名二つ岳給源火山灰層(FA層)である。図版中、やや白っぽくブロック状に認められるのがそれである。
- (2) カマド状遺構の東側に確認された貯蔵穴内の遺物出土状態。环(第8図-5)、高环(第8図-9、第9図-15)、壇(第10図-18)が出土している。
- (3) カマド状遺構とその遺物出土状態(南より)。北壁中央に立石と粘土塊、さらに焼土塊を確認した。しかし、この部分はちょうど後世の搅乱をうけていた為、明確にカマドとして把えることができなかった。一応、ここではカマド状遺構として呼称しておく。このカマド状遺構西脇には壇(第7図-1)、と高环(第9図-11、12)の破片を集積したものを確認した。
- (4) 入口状施設柱穴(西より)。この住居址には、貯蔵穴及び4本の主柱穴の他に住居址南北西隅に基壇状の高まりを設け、その中に2本のPitを穿った遺構が確認できた。写真中央がそれである。2個のPitは南北方向に2個継列し、南のものは不整形形、北のものは、やや小さく円形である。なお北のPitは垂直方向に掘られるのではなく斜め方向、すなわち住居址中央方向に向って斜め方向に掘られていた。



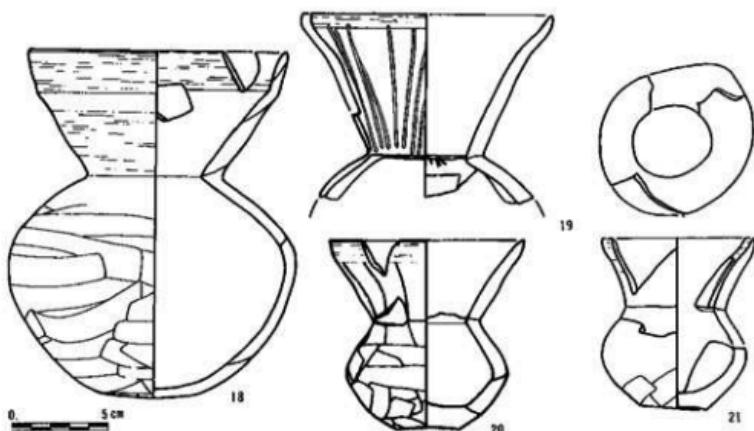
第7図 第1号住居址出土の土師器 (1)



第8図 第1号住居址出土の土師器(2)



第9図 第1号住居址出土の土師器(3)



第10図 第1号住居址出土の土師器(4)

出土遺物（第7図～第11図）

第1号住居址出土のおもな遺物は、壺、甕、塊、環、高环、珪である。その他砾石が出土している。出土土師器の内、大形瓶（第7図-2）と甕（第8図-4）は住居址覆土上層からの出土である。

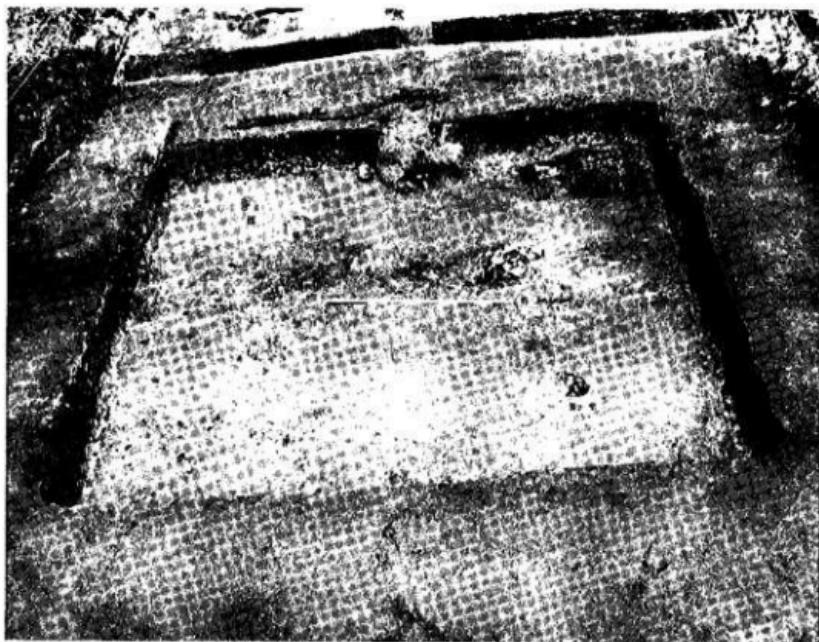
壺は底部から大きく球形にふくらむ胴部を有するもの（第7図-1）と口縁部中の長い口縁部を有するもの（第8図-3）とに2分できる。环は底部から直線的に開くが口唇部近くではほぼ垂直に立ちあがり棱をもつもの（第8図-5）と底部から直線的にそのまま口縁部まで開くもの（第8図-6, 8）がある。塊は所謂「内斜口縁」を有するものである。（第8図-7）高环はいずれも环部に棱を有するもので、脚部の形態で2分できる。すなわち、ラッパ状にひろがるもの（第9図14～17）と、脚部に段を有するものである。（第9図-10）珪は小形でそろばん玉状の胴部と直線的にハの字状に開く口縁部をもつもの（第10図-20, 21）大形で球形の胴部に頸部から直線的に開く口縁部が口唇部近くでやや内湾ぎみに立ちあがり棱を有するもの（第10図-18, 19）とに2分できる。

これらの遺物の出土状態は第6図に示されるように接合関係が非常に多く、又破片が距離をおいて接合するなど遺物の動きは動的である。又、カマド状造構を中心とした遺物の動きが顕著である。



第11図 第1号
住居址出土の砾石

2) 第2号住居址

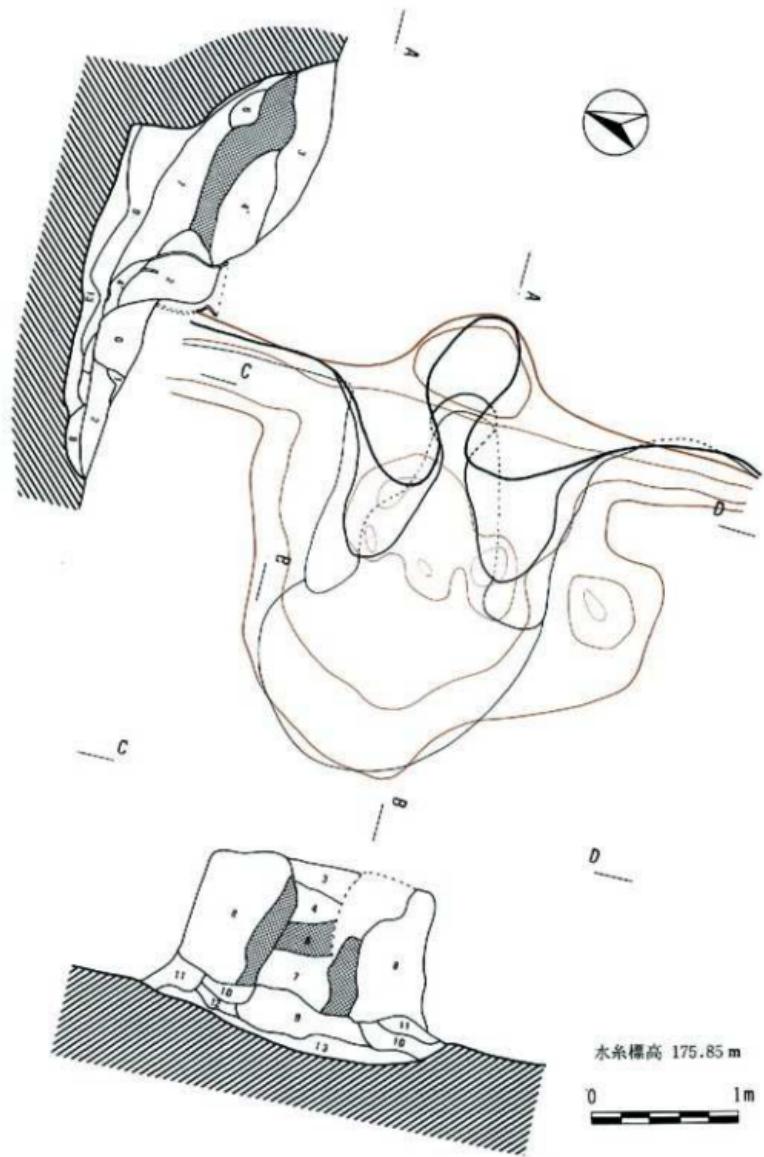


図版3 第2号住居址 全景

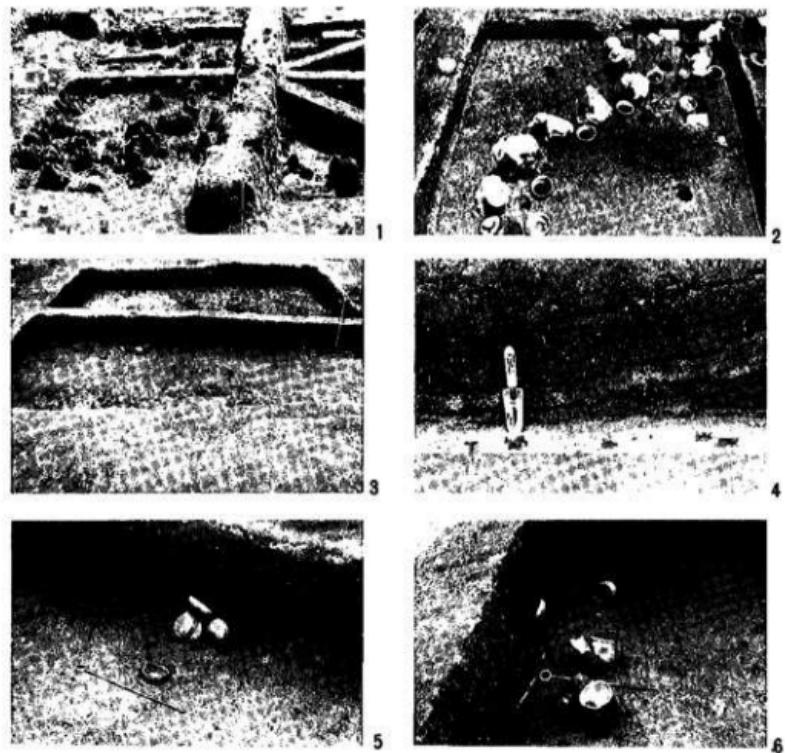
第2号住居址は発掘区のはば中央、第3号住居址と第4号住居址との間に位置している。この住居址も掘り込みが深く造構、遺物の残りは非常に良好であった。住居址東壁中央にはロームブロックを袖として用いたカマドを付設している。カマドの南には平面形隅丸長方形の深い貯蔵穴がある。主柱穴は4本、壁周溝も全周している。覆土中には床面直上にFAの堆積が認められた。

項目		項目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N-83°-E	主柱穴 P ₁	34	33	41
東西方向の辺の長さ cm	640	" P ₂	47	37	32
		" P ₃	46	33	36.5
		" P ₄	37	35	41
		貯蔵穴 P ₅	111	86	16.9
南北方向の辺の長さ cm	630	P ₆	54	38	59
		P ₇			
		壁周溝	32	20	8
壁高 cm	58				

第3表 第2号住居址計測表

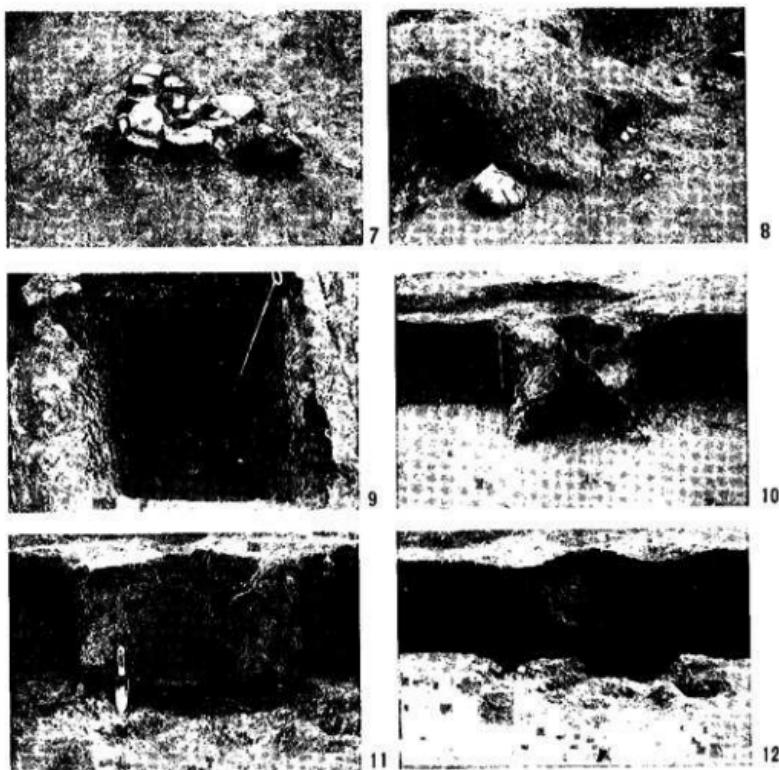


第12図 第2号住居址:カマド実測図



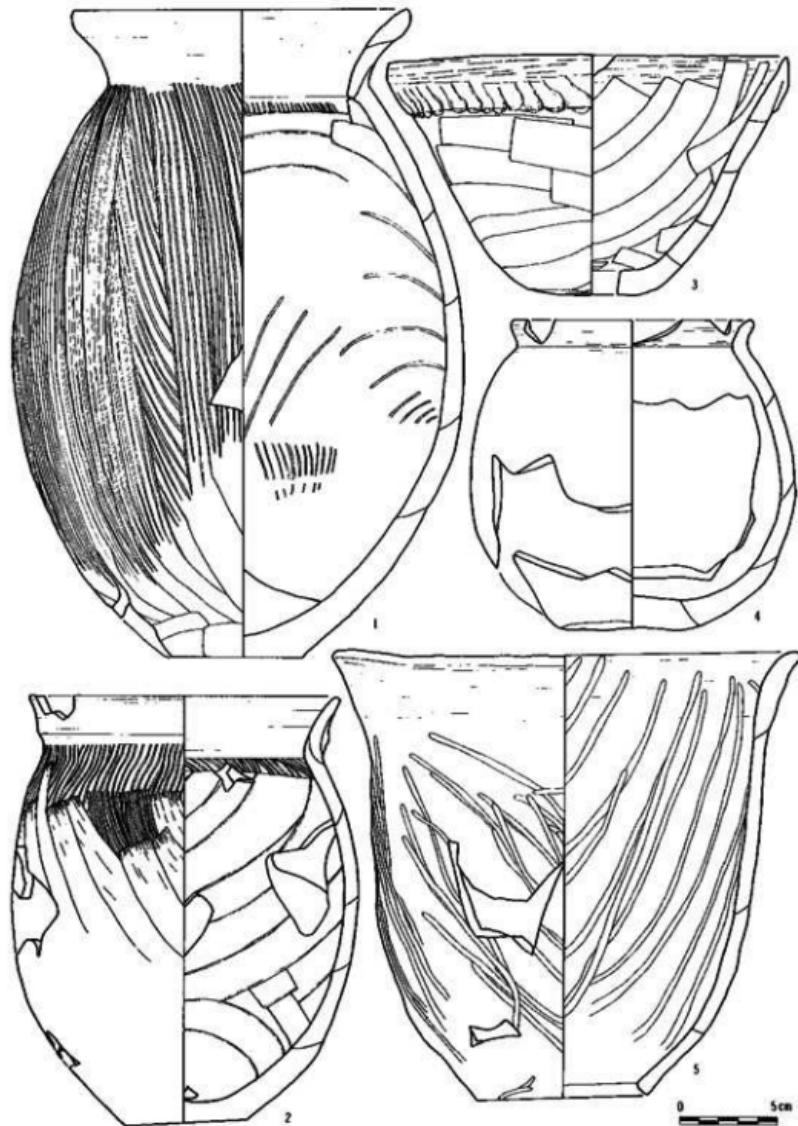
図版4 第2号住居址の発掘(1)

- (1) 第2号住居址覆土上層における遺物の出土状態。 (西より)
- (2) 第2号住居址の床面精査状況。 (西より)
- (3), (4) 第2号住居址の覆土中に確認されたFAの堆積状況。図版中白っぽくみえるのがFAである。
- (5) 第2号住居址西壁南よりに土師器の壺(第17図16、17、18、25)と塊(第16図10、13)が、立てかけられているような形で重なりあって出土している。
- (6) 南壁中央の遺物出土状態。 (北より)

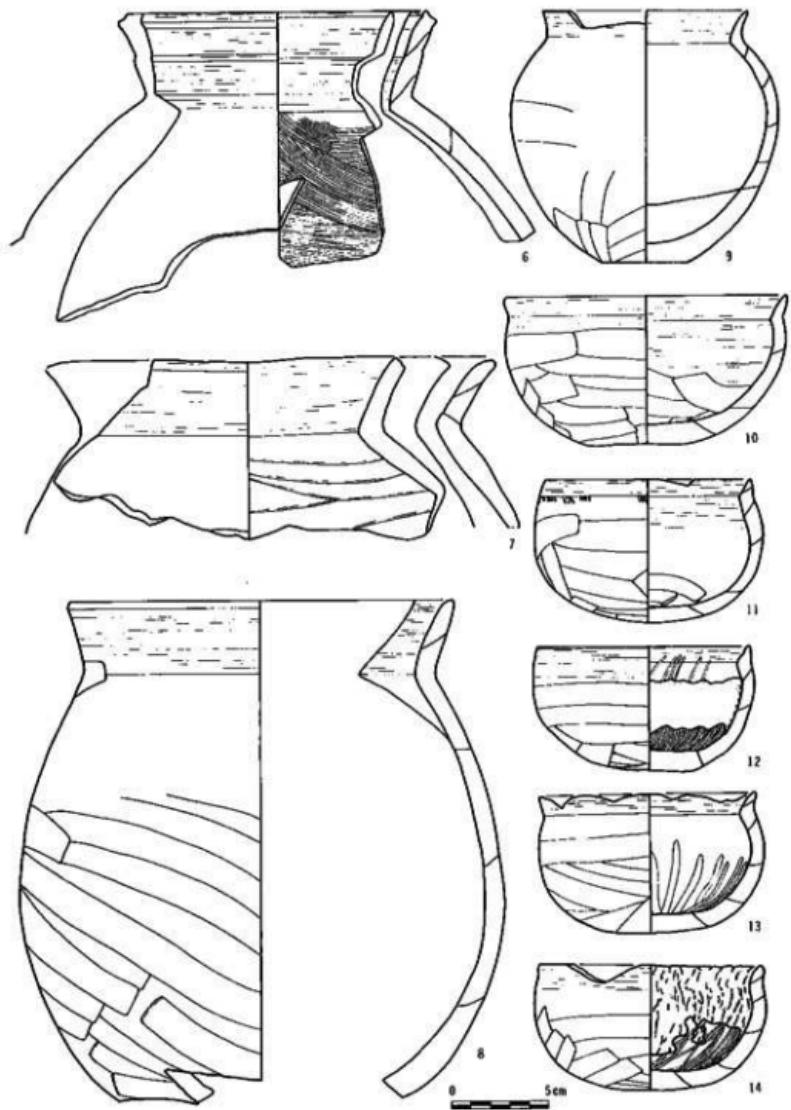


図版5 第2号住居址の発掘(2)

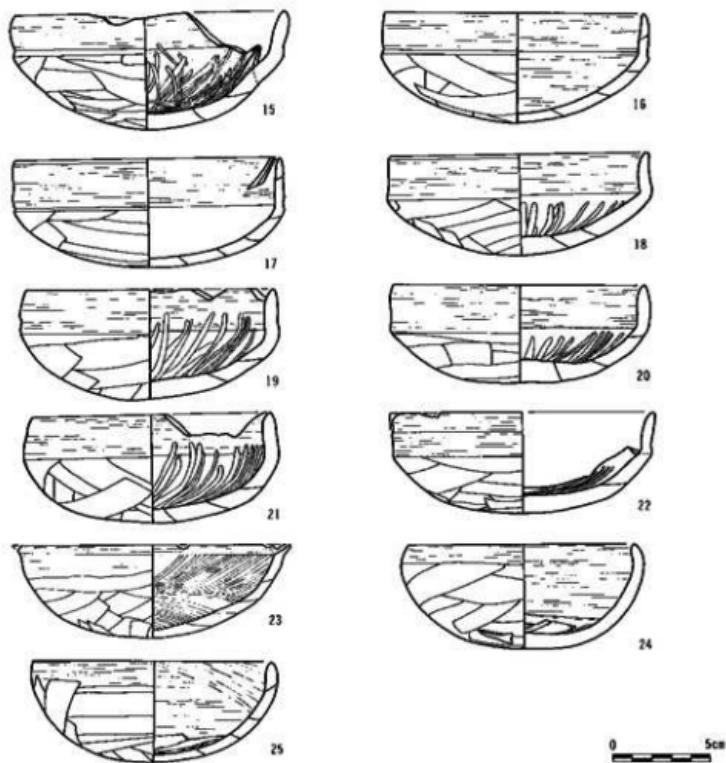
- (7) 第2号住居址のほぼ中央部、甕(第15図1)と小形の瓶(第15図3)の出土状態。瓶内より石製の勾玉(第18図28)が出土している。
- (8) 第2号住居址カマド周辺の遺物出土状態。カマド内より甕(第16図8)、カマド北側には小形甕(第15図2)が出土している。
- (9) 貯蔵穴内の遺物出土状態。貯蔵穴は深く床面から110cmの深さを計る。
- (10) (11) (12) 第2号住居址カマドの発掘状態である。カマドはロームブロックを袖としてもっている。煙道は発達せず、カマド内には支脚等はみとめられなかった。(11)はカマドの袖部の切開の状態である。堀り方埋め土、袖のロームブロック、袖部の熱による赤化の状態がわかる。(12)は堀り方の状態である。(第12図参照)



第15図 第2号住居址出土の土師器(1)



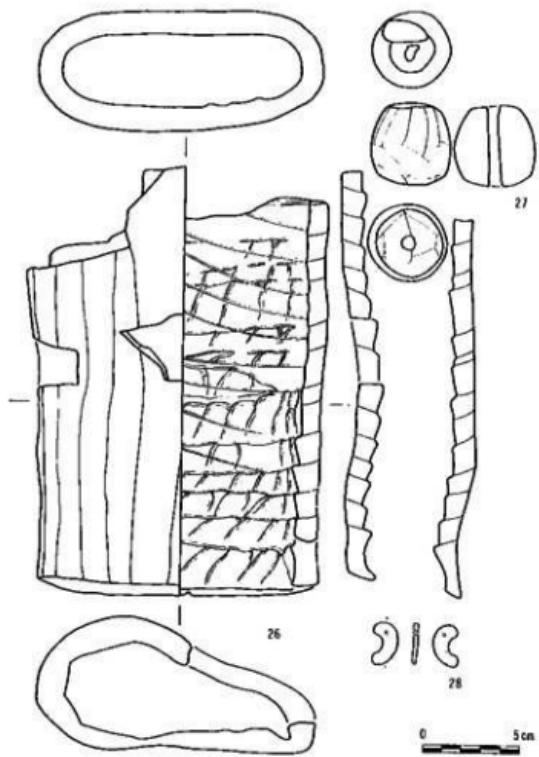
第16図 第2号住居址出土の土師器(2)



第17図 第2号住居址出土の土師器(3)

出土遺物（第15図～第18図）

第2号住居址出土の土師器は壺1、甕6、瓶2、环14、碗5であり高环の欠落が指摘できる。この他、筒形土製品（第18図26）、土製紡錘車（第18図27）、淡青緑色の黄岩製の勾玉（第18図28）などの遺物が出土している。この内、甕（第16図7）と土製紡錘車は住居址覆土上層からの出土であり、筒形土製品はF A層上面からの出土である。他の遺物については床直からの出土である。壺（第16図6）は口縁部にわずかに段を有し、胴部から「くの字」に屈曲するものである。胴部は欠失しているが、かなり張るものであろう。甕（第15図1、2、4、第16図7、8、9）は甕と小形甕とに2分できる。さらに甕は、長胴の胴部を有し、口縁部は胴部から「くの字」に屈曲し口唇部は肥厚するもので、整形技法上の特徴として胴部表面にはハケ目を残すもの（第15図



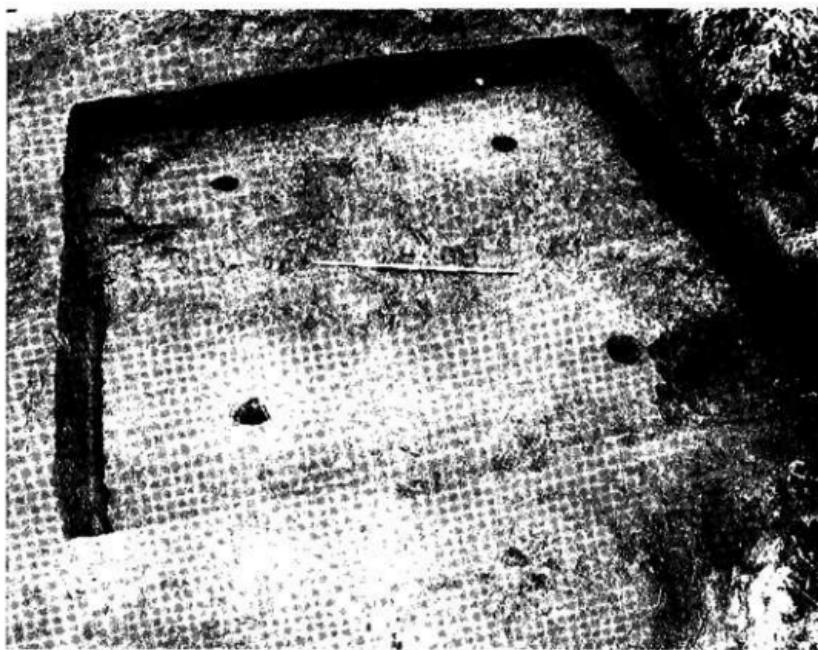
第18図 第2号住居址出土の遺物

1)。胸部はやや長めの球形状を呈し、口縁部と胸部との屈曲も前者に比べて弱いもの（第16図8）とに2分できる。又、小形甌も口縁部にわずかに棱を有し口縁部から胸部に至る屈曲はゆるく胸部のふくらみもあり顕著でないもので胸部表面にハケ目を残すものの（第15図2）と、ちょうど甌の胸部を上下に延ばしたような形を呈するもの（第15図4、第16図9）とに2分できる。甌（第15図3、5）は小形で口縁部は折り返し口縁を有し、底部から口縁部まで直線的に「逆ハの字」状に広がるもので底部には一孔を有するもの（第15図3）と、大形で胸部はやや下ぶくれで口唇部は肥厚し底部が大きく抜かれているもの（第15図5）とに2分できる。整形上の特徴として前者がヘラケズリと指頭による圧痕が顕著であるのに対し、後者はヘラミガキが顕著である。環（第17図）は口縁部に棱を有するもの（15~22）、棱を有せず口唇部近くで内済するものの（24、25）、さらには所謂「内斜口縁」を有するもの（23）とに3分できる。甌（第16図10~14）は丸底あるいは小さな上げ底状の底部を有するものであり口縁部はいずれも「内斜口縁」を有する。环、甌ともに整形技法上の特徴として内面へラミガキによる「放射状暗文」を有するものが多い。

筒形土製品（第18図26）は断面形が上下につぶれた円錐形を呈するもので、胎土は精製されず、内面には粘土帶の接合痕を明瞭に残し、外面には輻方向の荒いヘラケズリが施されているもので

これらの遺物はいずれも単体で出土しているものであり、距離をおいての遺物同士での接合関係はほとんど存在しない。（第14図）

3) 第3号住居址

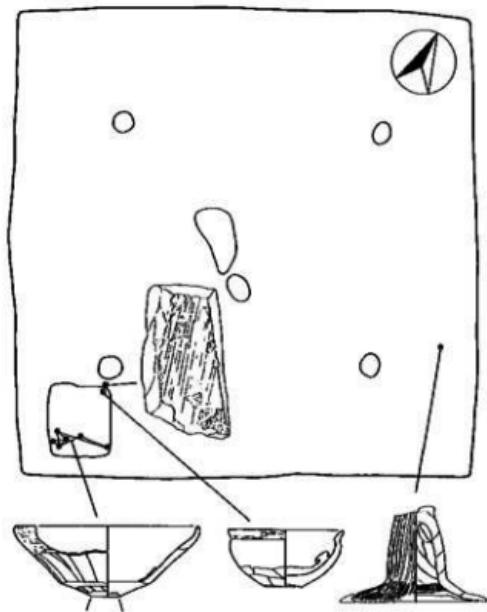


図版 6 第3号住居址全景

第3号住居址は第1号住居址と第2号住居址との間に位置している。この住居址はカマドを有せず、住居址中央に地床炉を有している。床はかたくしめり、4本の主柱穴と住居址南西隅に隅丸方形のやや浅い貯蔵穴をもっている。又、壁下には周溝が全周している。特記されることとして、住居址北東隅に焼土層の塊が分布していたことがあげられる。

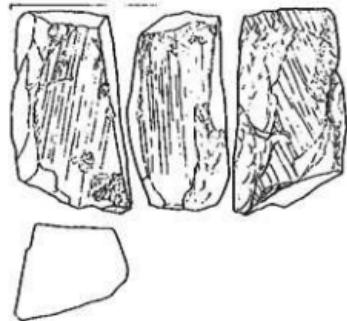
項目		項目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N-23°-10'	主柱穴 P ₁	30	260	160
		" P ₂	29	25	90
東西方向の辺の長さ cm	610	" P ₃	32	29	92
		" P ₄	30	28	108
南北方向の辺の長さ cm	630	貯蔵穴 P ₅	98	92	47
		P ₆			
壁 高 cm	55	P ₇			
		壁周溝	30	16	8

第4表 第3号住居址計測表



第19図 第3号住居址の遺物分布

さな底部を有するものである。高環（同図1、4）は環部と脚部が1個ずつ出土しているがいずれも別個体である。脚部はヘラミガキによる暗文が卓越している。堆（同図3）は口縁部のみの出土である。口唇部近くでやや直に立ち上がるるものであり、内外面ともにヘラミガキによる暗文が顕著である。砥石（第20図）は泥岩製のもので3面に使用面が認められる。

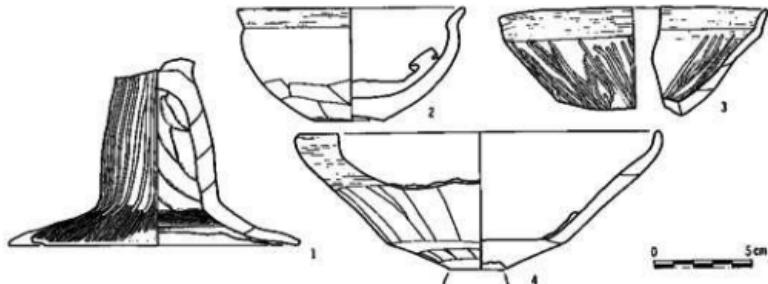


第20図 第3号住居址出土の砥石

出土遺物（第20図、第21図）

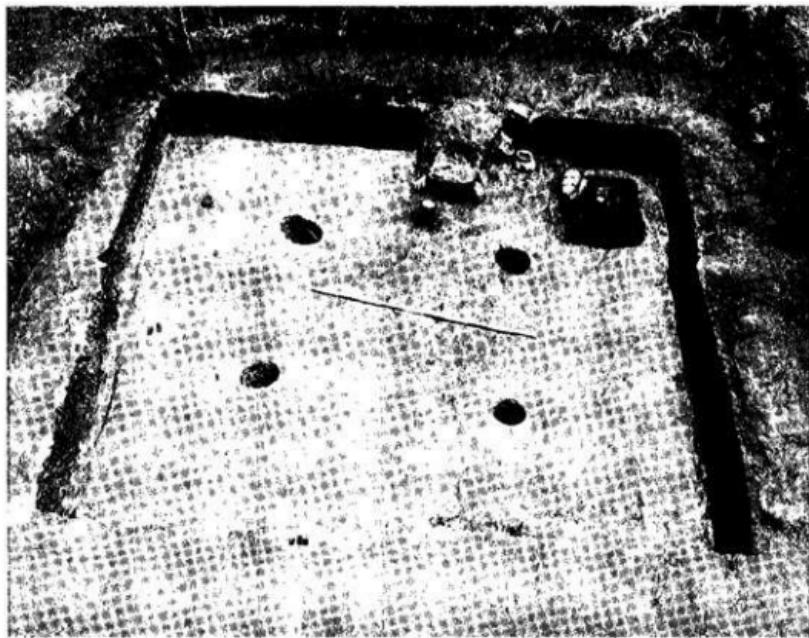
第3号住居址のおもな出土遺物は堆1、高環2、堆1、砥石1である。遺物はすべて床面直上からの出土でありその出土は貯蔵穴に集中している。（第19図）

堆（第21図2）は内斜口縁を有するもので、底部はやや底風の小



第21図 第3号住居址出土の土器

4) 第4号住居址

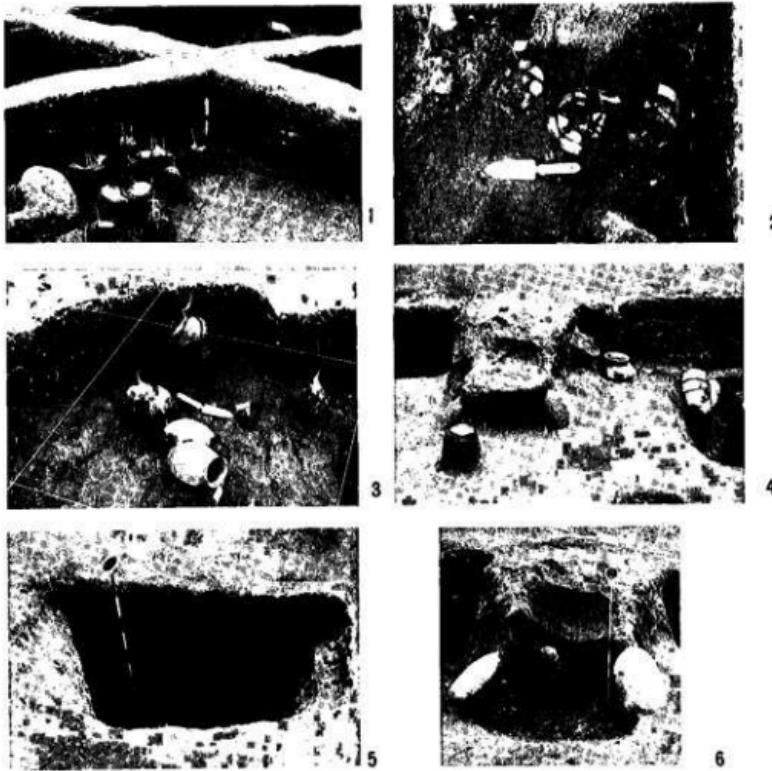


図版7 第4号住居址全景

第4号住居址は発掘区の中央、第2号住居址の西に近接して確認された。この住居址も非常に造構の残りは良好であり、遺物の出土も多かった。住居址東壁中央よりやや南にはカマドの袖の部分に石を用いて鳥居状に組んだカマドが付設されている。カマド南には平面形長方形の貯藏穴を有している。主柱穴は4本、壁周溝も全周している。覆土中にはFAの堆積が認められた。

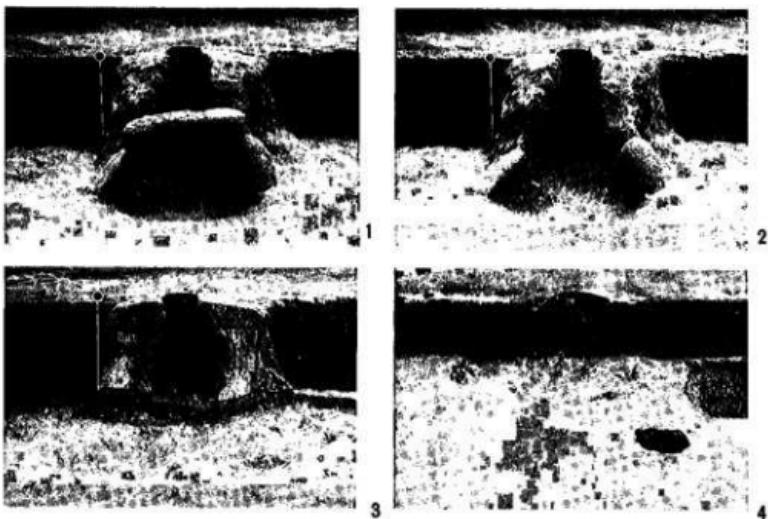
項目		項目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	E-3°-S	主柱穴 P ₁	48	37	54
		P ₂	42	36	53
東西方向の辺の長さ cm	530	P ₃	46	30	50
		P ₄	29	25	48
南北方向の辺の長さ cm	500	貯藏穴 P ₅	119	99	86
		P ₆			
壁 高 cm	46	P ₇			
		壁周溝	28	14	8

第5表 第4号住居址計測表



図版8 第4号住居址の発掘

- (1) 第4号住居址の覆土中に確認されたFAの堆積状況。写真中、やや白っぽくみえるところがFA層である。
- (2) 第4号住居址FA層の上面から出土した杯（第28図、7、8、10、14~21）の出土状態。いずれもふせられた状態で出土している。
- (3) FA層の下面の遺物出土状態、壺（第27図2）と甕（第27図4）が出土している。
- (4) カマド周辺の遺物出土状態。石を鳥居状に組んだカマドの脇に壺（第29図26）と貯蔵穴に落ち込んだ状態で甕（第29図23）が確認できた。
- (5) カマド南側の貯蔵穴の土層堆積状態。（第24図）
- (6) カマドの切開状態、カマド内に石製の支脚をみとめることができる。（第23図）



図版9 第4号住居址のカマド

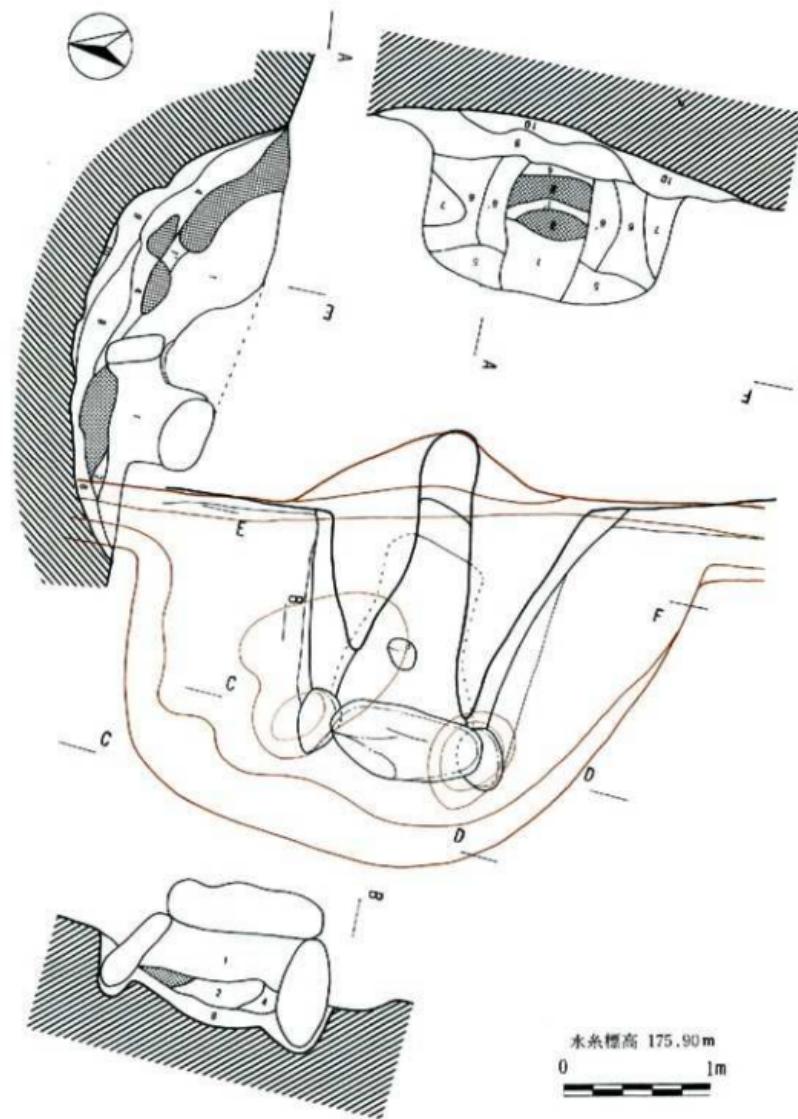
- (1) カマドの完掘状態、石を鳥居状に組んだ状態である。煙道はほとんど発達していない。
- (2) 鳥居状の石の上部を取りのぞいた状態。ロームブロックと石をもちいて抽部を構成している。又、このカマド内には石製の支脚がみとめられた。
- (3) カマド抽部の切開の状態。ロームブロックとこれが熱によって赤化した部分、さらには、カマドを付設する場合の住居址の掘り方埋め土の黒色土がみとめられる。
- (4) カマドの掘り方の状態、カマドの火床をはぐと黒色土がみとめられ、これをはぐと不整円形の落ち込みとなる。（第23図）

出土遺物（第26図～第29図）

第4号住居址の出土遺物は、住居址覆土中にみとめられるFA屑をはさんで、上層の遺物と下層、すなわち床面直上の遺物とに層位的に2分できる。

上層からは、壺1（第29図24）、甕4（第27図5、第28図6、22、第29図27）、高环1（第27図3）、堆1（第29図24）、环12（第28図7～8、10、13～21）が確認された。これらの土器はいずれも破損が著しい。

壺（第27図1）は、折り返し口縁を有するものあり、口縁部は頸部でくの字に屈曲し、大きく開くものである。胴部は上半部に最大径を有する。甕は大形の甕（第28図6、22、第29図27）と小形の甕（第27図5）とに2分できる。大形甕は長胴化した胴部を有し、整形技法として横方



第23図 第4号住居址カマド実測図

向のヘラケズリが頗著なもの(第29図27)と、胴部最大径を胴中央部に持ち整形技法としてハケ目痕を明瞭に有するもの(第28図22)とに2分できる。小形甕(第27図5)は胴部中央に最大径を有するものであり底部はやや上げ底風のものである。高杯(第27図3)は逆ハの字形に直線的に開く杯部を有するもので、脚部との接合はホゾによっている。掛(第29図24)は頸部から直線的に直に立ち上がる口縁部を有するものである。杯(第28図7、8、10、13~21)は所謂、壺に近い器形のもの(第28図13)と口縁部に明瞭に棱を有するもの(第28図7、8、10、14~21)とに2分され、さらには棱を有するものは、棱の部分を凸帯状に作り出すもの(第28図15~21)とただ単に棱を作り出すもの(第28図7、8、10、14)とに2分できる。

床面直上からは、甕1(第29図26)、甕2(第27図2、4)、瓶1(第29図23)、杯3(第28図9、11、12)、壺1(第29図25)が確認できた。

甕(第29図、26)は胴部下半を欠損してはいるが、かなり球形状の胴部を有するものと思われる。口縁部は肥厚し、口縁部半ばに棱を形成している。甕は、口縁部が折返しの手法によって把厚し、棱を有するもので、胴部から短かく「くの字」に屈曲し、胴中央部に最大径を有し、ヘラミガキが頗著なもの(第27図2)と胴部はほとんどふくらみをもたずズン胴で内面と外面にハケ目痕を残すもの(第27図4)とに2分できる。瓶(第29図23)は、底部全体を孔としているものであり、胴部は砲弾状を呈し、口縁部はわずかに外反している。胴部内面には縱方向のヘラミガキが頗著である。杯(第28図9、11、12)はいずれも大形で深く、口縁部と胴部との境には明瞭に棱を有し、口縁部は直に立ち上がるものである。壺(第29図25)は、小形のもので、口縁部は内湾する、所謂「内斜口縁」を有するものであり、胴部はやや下ぶくれのものである。

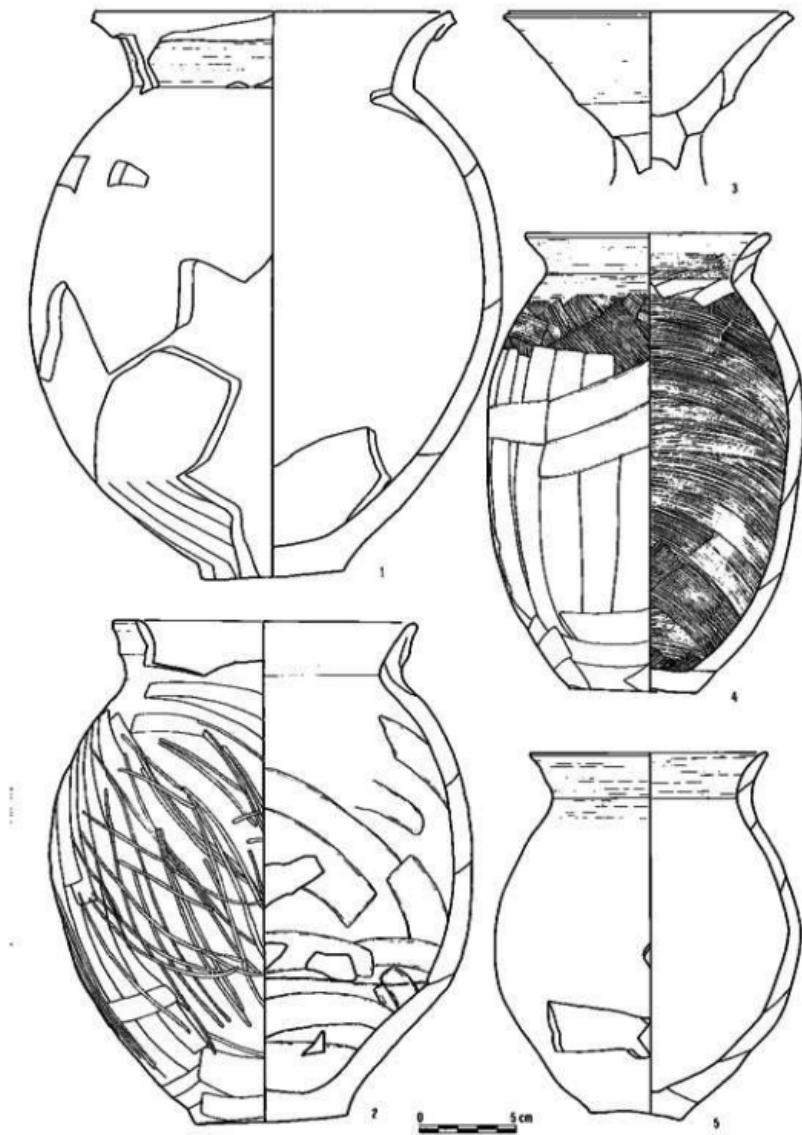
以上の土師器の他に滑石製の勾玉が第4号住居址からは出土している。(第26図)

第4号住居址からはFA層を狭んで層位的に2つの土師器群が確認できた。この2つの土師器群は、その土器組成の上においてはほとんど差異はないが、甕、杯などにおいて形態的な差異は明瞭である。特にFA層上部から確認された土師器群は、これから記述する第7号住居址、第8号住居址などの土師器群のあり方の検討を通してさらに明瞭なものとなろう。

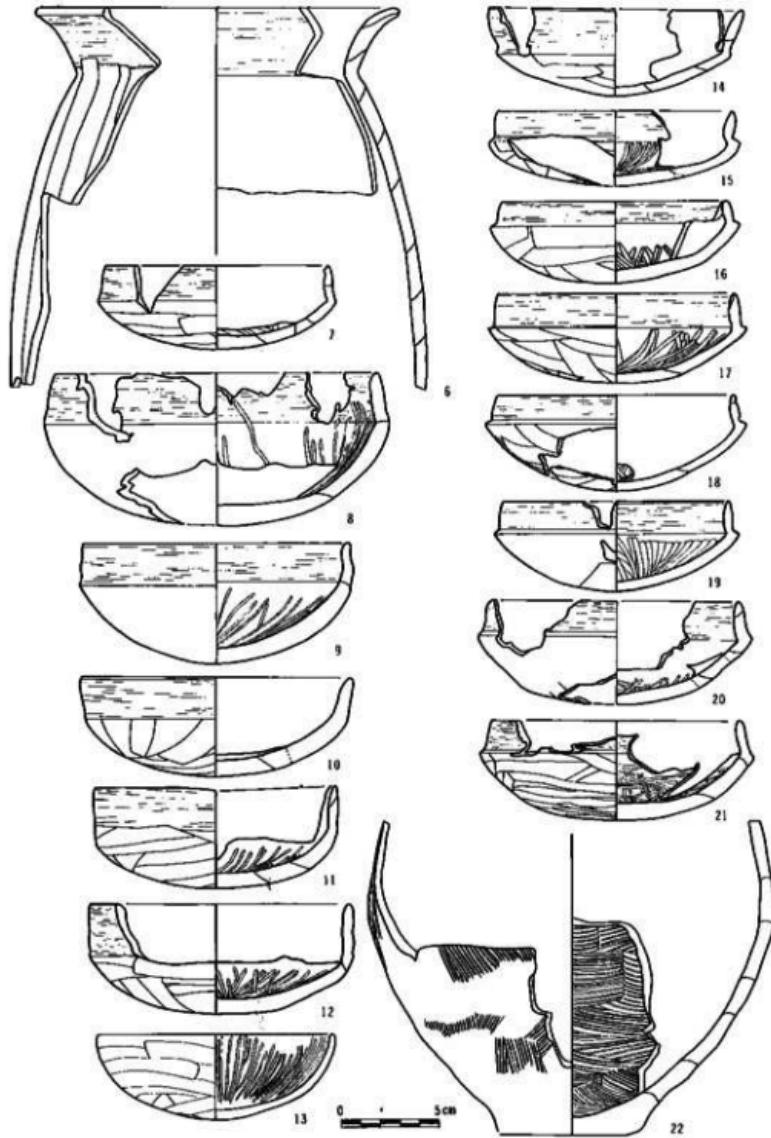
遺物の出土状態(第25図)は、床面直上の遺物はほとんど単独で接合関係をもたない状態で出土しているものに対して、FA上層の遺物群は非常に活発な動きを見せている。



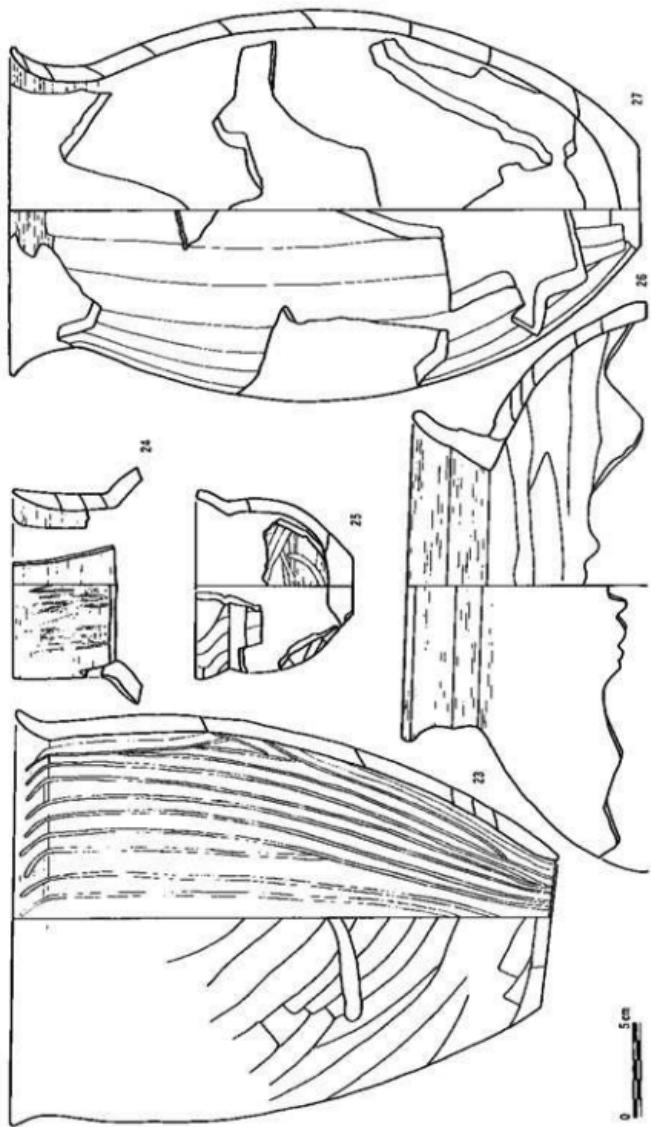
第26図
第4号住居址出土の勾玉



第27図 第4号住居址出土の土師器(1)



第28図 第4号住居址出土の土師器(2)



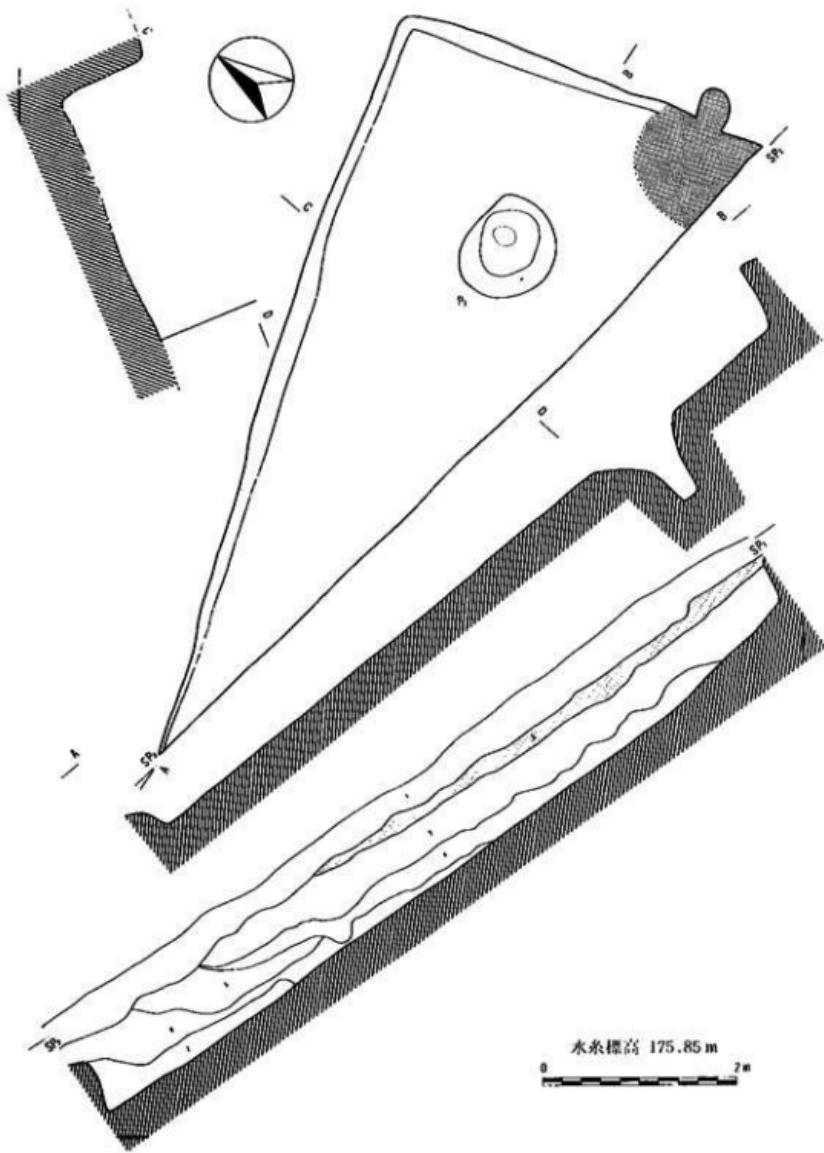
第29図 第4号住居址出土の土師器(3)

(5) 第5号住居址



図版10 第5号、6号、7号、8号、9号 住居址全景

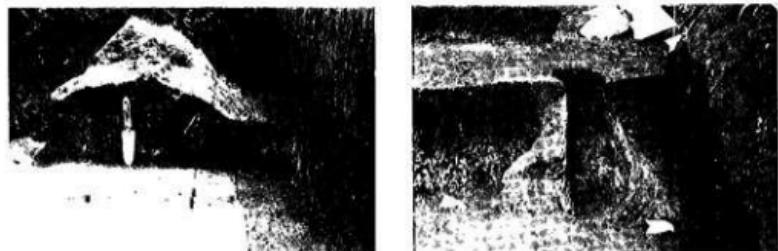
第5号、6号、7号、8号、9号住居址は発掘区の西端に互いに切り合い関係をもって確認された。図版中央のポールが入っている住居址が第7号住居址である。その右が第5号住居址である。第5号住居址は第7号住居址の一部を切って構築されている。第5号住居址は、発掘区の都合で全掘することができなかった。



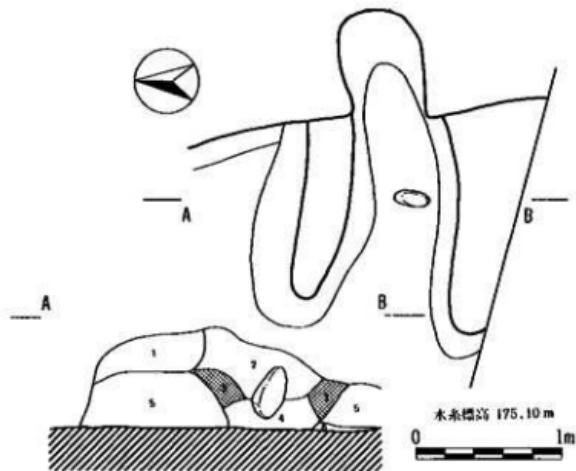
第30圖 第5號住居址測量圖

項目		項目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N-76° E	主柱穴 P ₁	106	90	80
東西方向の辺の長さ cm		# P ₂			
# P ₃					
# P ₄					
南北方向の辺の長さ cm		貯藏穴 P ₅			
P ₆					
壁 高 cm	80	P ₇			
		壁周溝			

第6表 第5号住居址計測表



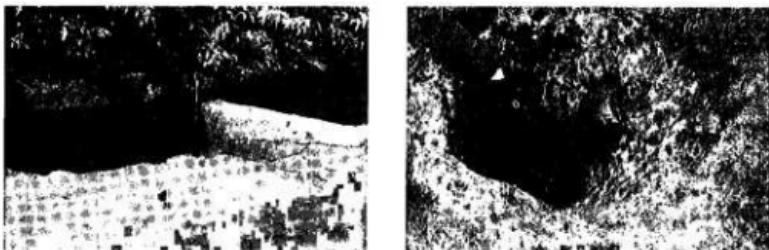
図版11 第5号住居址のカマド



第31図 第5号住居址 カマド実測図

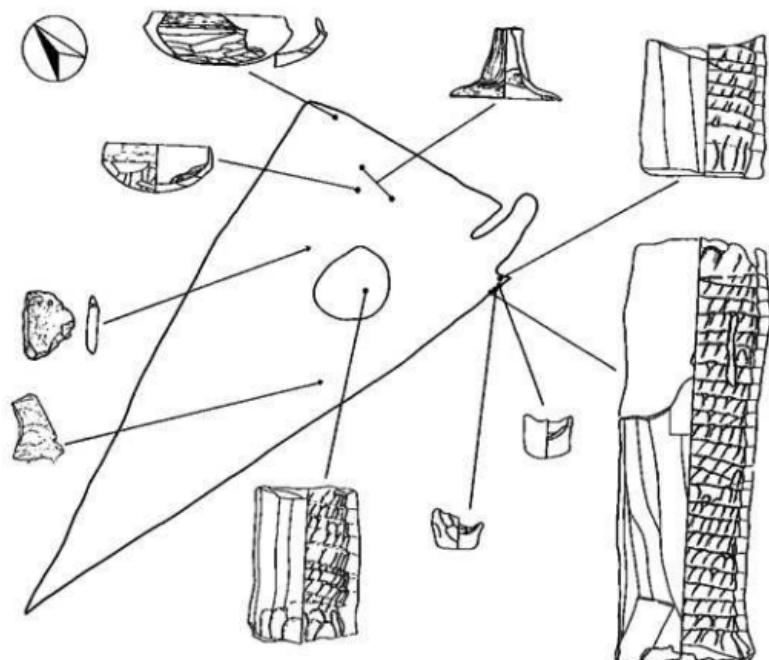
第5号住居址は、第7号住居址の南に位置しており、住居址の北東の隅の一部を調査したにすぎない。東壁には橙灰白色の粘土を土として使用し、石製の支脚を有したカマドがかなり崩れた形で確認できた。このカマドの位置は、東壁でもかなり北側に寄った位置であることが予想される。又主柱穴の内、1個を確認した。壁周溝はもない。

(第30図、第31図)

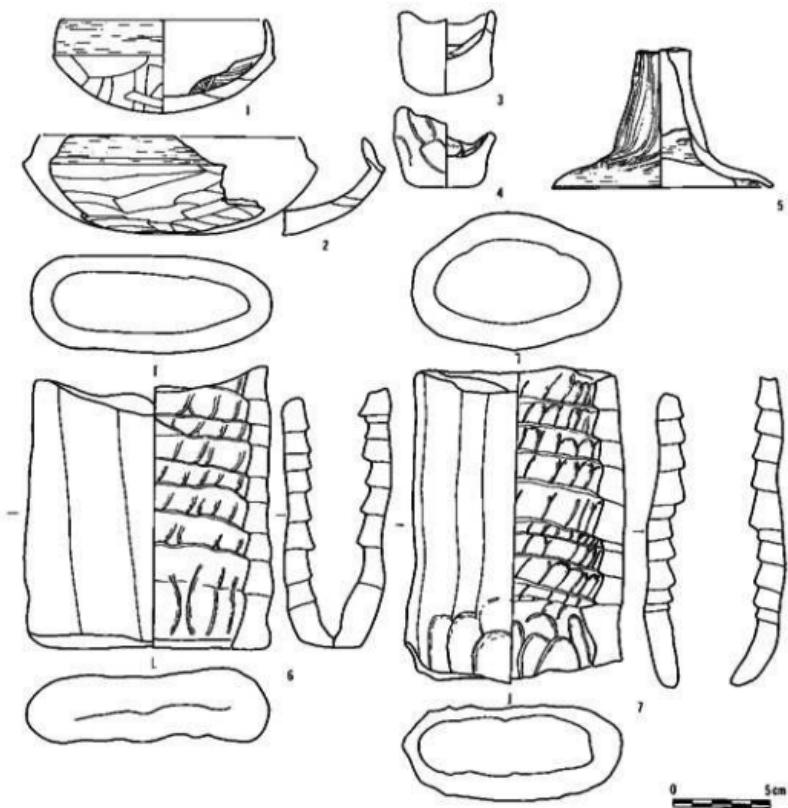


図版12 第5号住居址の発掘

第5号住居址の掘り込みは深く、住居址覆土上層には浅間B軽石の堆積が認められた。遺物の出土状態はすべて床面直上からの出土である。遺物の中では滑石製の玉の未製品、手捏ねの土器、さらには第2号住居址F.A.上層から出土した、断面形が上下につぶれた円形の筒形土製品が確認できた。これらは特筆されよう。



第32図 第5号住居址の遺物分布



第33図 第5号住居址出土の遺物

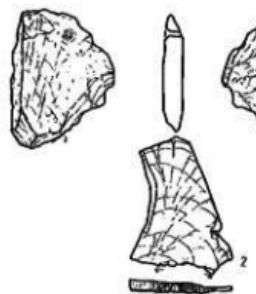
第5号住居址からは、環2（第33図1、2）、高環の脚（第33図5）、手捏ね土器2（第33図3、4）、筒形土製品3（第33図6、7、第34図8）、滑石製の玉の未製品2（第35図）が確認された。土師器類については完形品は皆無である。

环は口縁部と胴部との境が凸带状に張り出す稜を有するものであり、口縁部はやや内傾するものである。（第33図1、2）、高環の脚（第33図5）は、小形の脚であり、脚柱部下部にふくらみをもつ。裾部はやや内湾する。手捏ね土器（第33図3、4）はいずれも指頭の圧痕が明瞭なものである。筒形土製品は3点が出土した。（第33図6、7、第34図8）いずれも外面は荒い縱方向のヘラケズリ、内面には輪横痕と指頭の圧痕を明瞭に残している。断面形は、円を上下におしつぶ

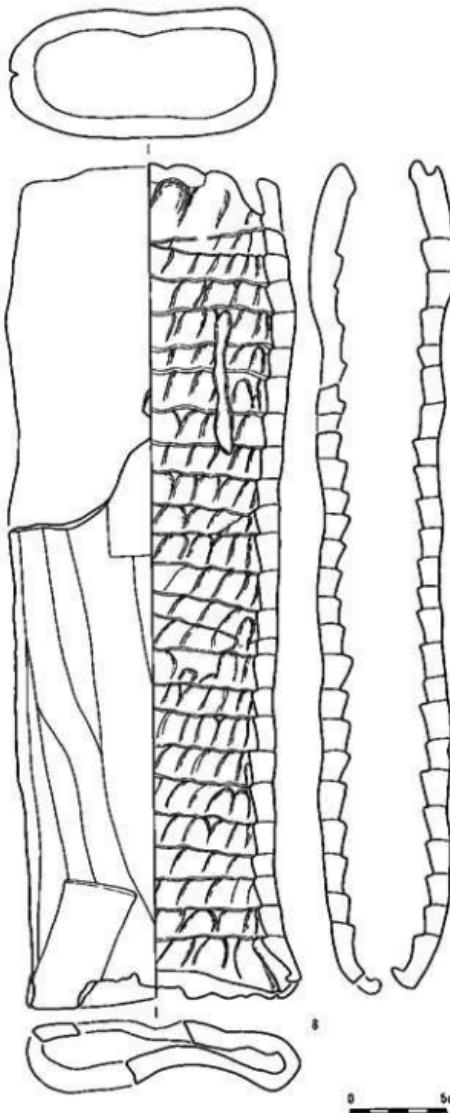
したような形を呈する。これらの内一点についてはほぼ完形に復すことができた。(第34図)これによると一端は押しつぶしながらしばったような形になっているが、完全にはおしつぶされない。他の一端は、しばってはいるが、不完全におわっている。他の2点については、一端は残されているが、他の一端は接合帶よりきれいに割れている。(第33図67)。

滑石製の玉の未製品は荒く割りとられた剥片に片面より穿孔をうけているもの(第35図1)と板状に剥がされた剥片の一辺に加工痕がみとめられるもの(第35図2)とがある。

以上遺物は、ほとんど単体で出土しており、接合関係をもたない。これらの内、特に土製品がカマド周辺に集中して出土しているということは、この土製品の機能的な面を考えるに何らかの示唆を与えているように思われる。(第32図)

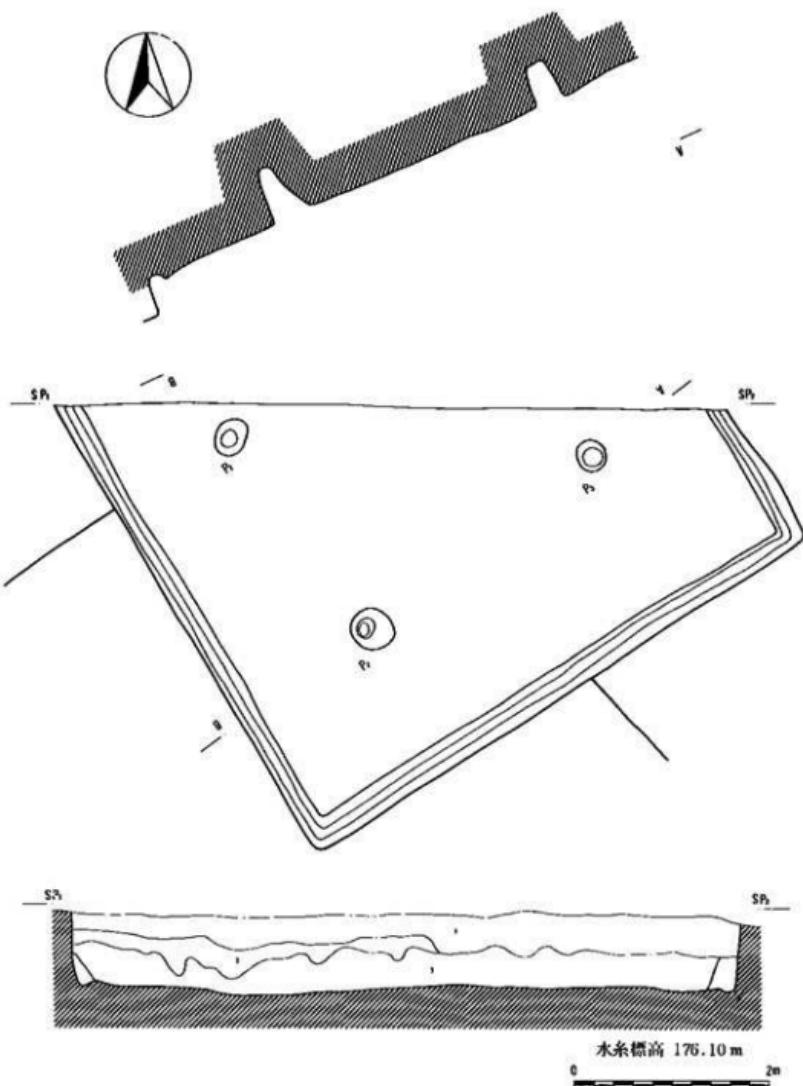


第35図 第5号住居址出土の石製品



第34図 第5号住居址出土の筒形土製品

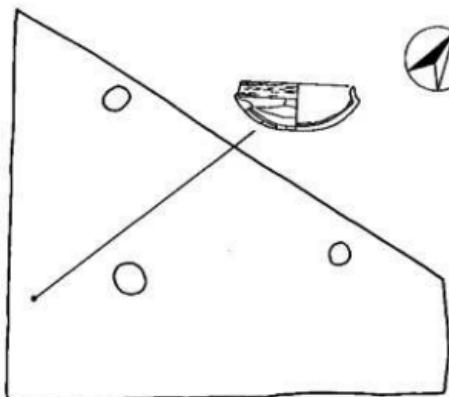
6) 第6号住居址



第36図 第6号住居址 災洞図

項目		項目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	600	主柱穴 P ₁	38	30	41
		" P ₂	46	46	56
東西方向の辺の長さ cm	600	" P ₃	31	27	42
		" P ₄			
		貯藏穴 P ₅			
南北方向の辺の長さ cm	36	P ₆			
		P ₇			
		壁周溝	30	18	8

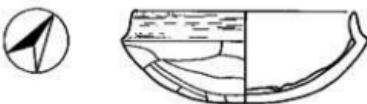
第7表 第6号住居址計測表



第37図 第6号住居址の遺物分布

第6号住居址は、第7号住居址の一部を切って構築されている。その為、第7号住居址のカマドはほとんど壊されている。この住居址の一部は現在、宅地の下となつており調査は不可能であった。この住居址にともなう施設として、主柱穴3と壁周溝を確認した。出土遺物は少なく完形に復元できるものは一点の杯のみであった。

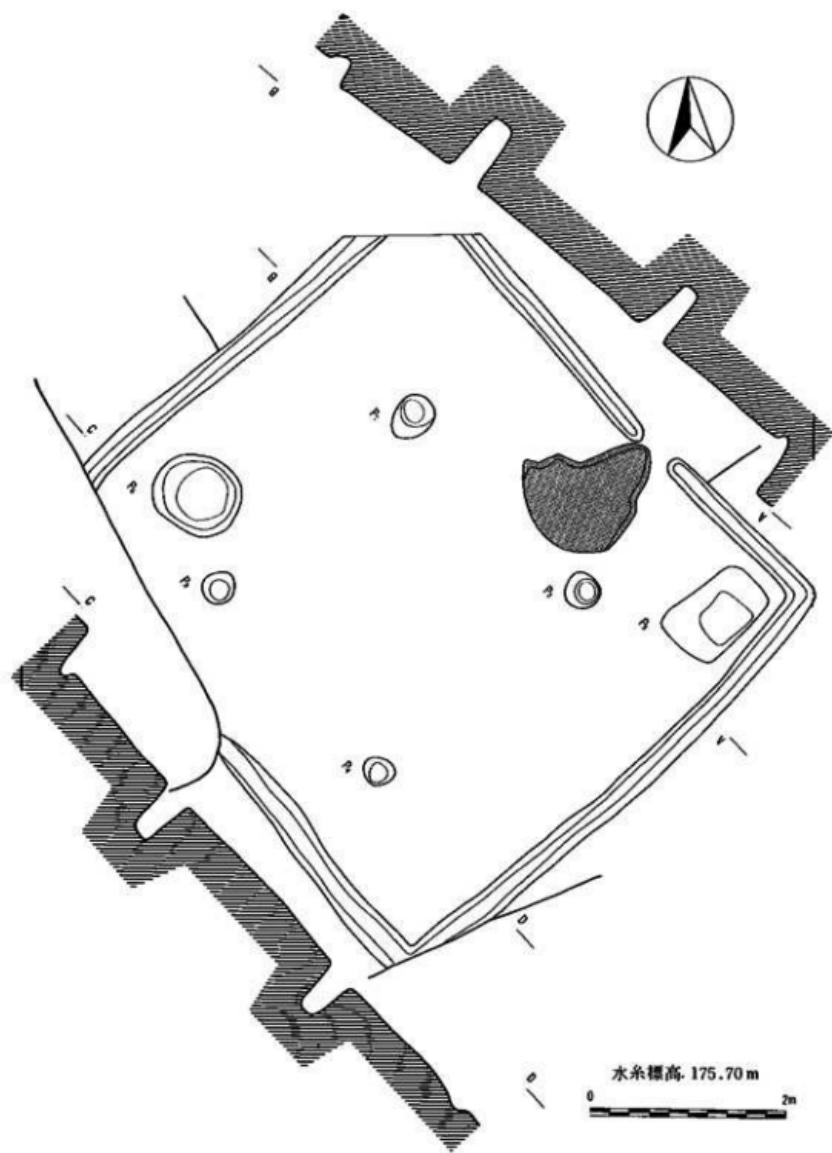
杯は口縁部と胴部との境に凸帯状に棱を張り出すものであり、口縁部はやや内傾ぎとなるものである。（第38図）



第38図 第6号住居址出土の土師器

1

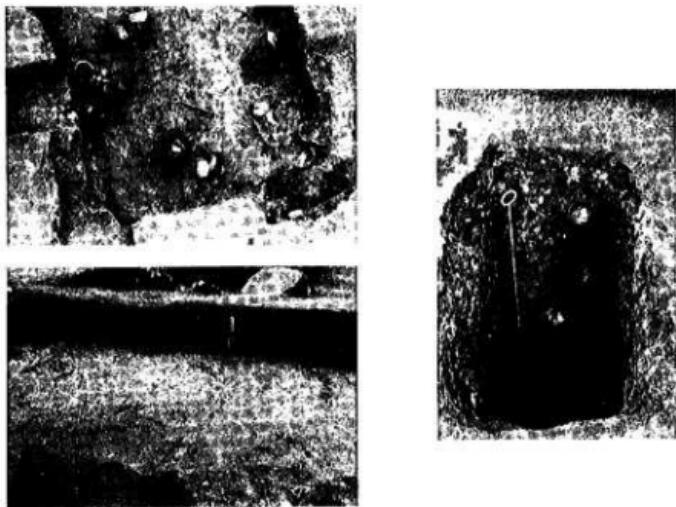
7) 第7号住居址



第39图 第7号住居址实测图

項目		項目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N-53°-E	主柱穴 P ₁	49	37	76
		" P ₂	37	35	62
東西方向の辺の長さ cm	590	" P ₃	35	32	56
		" P ₄	33	28	53
南北方向の辺の長さ cm	620	貯藏穴 P ₅	102	63	134
		P ₆	90	78	34
壁 高 cm	54	P ₇			
		壁周溝	34	15	10

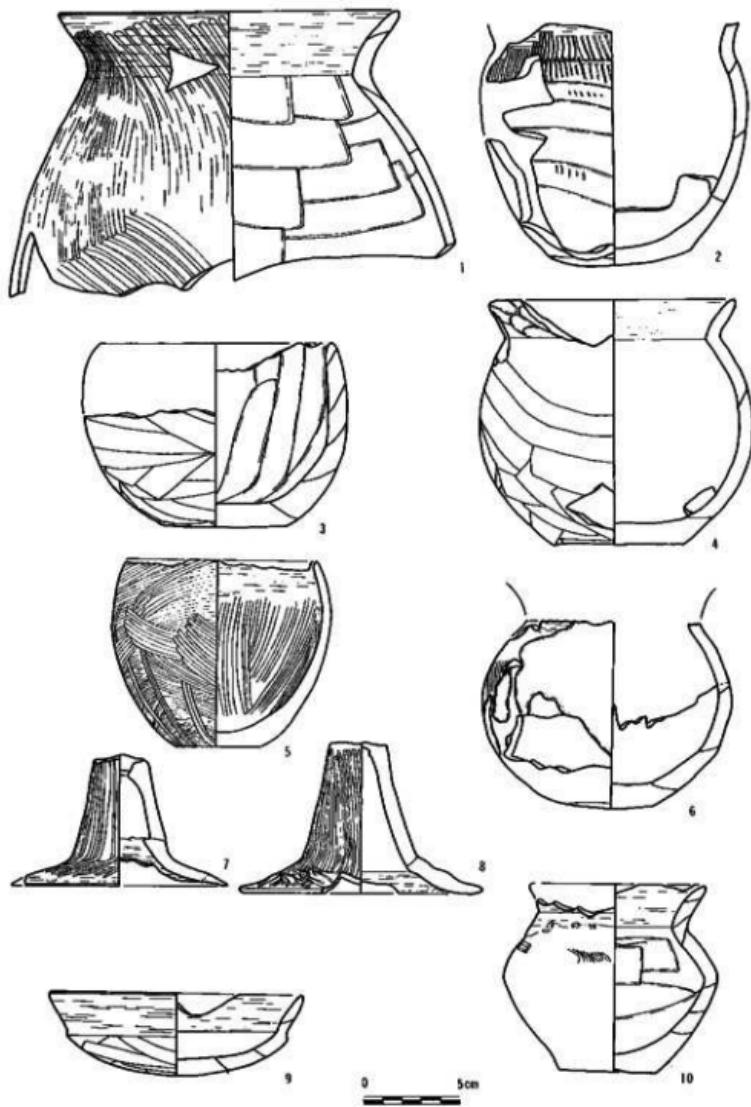
第8表 第7号住居址計測表



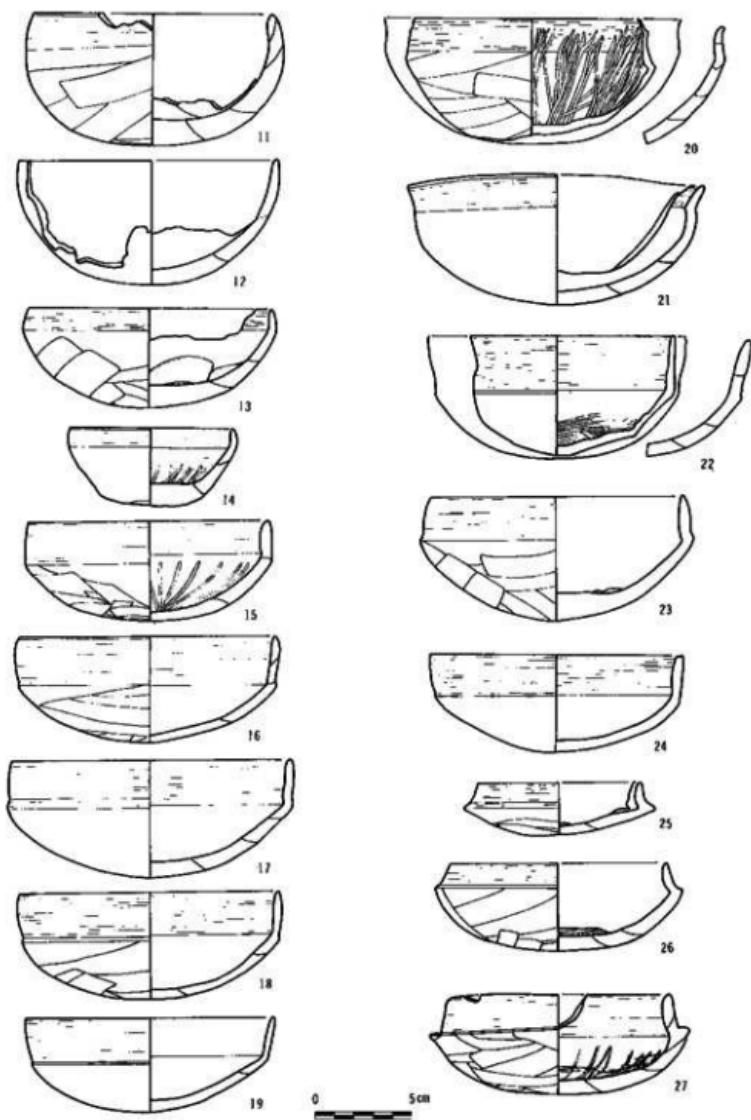
図版13 第7号住居址の発掘

第7号住居址は、第5号、第6号、第8号の各住居址と切り合い関係をもっている。すなわち第7号住居址はこれら3軒の住居址に住居址の一部を切られている。

第7号住居址は壁周溝が全周し、4本の主柱穴と、住居址北西隅に円形のピットを有している。又、東壁中央にはロームブロックを抽としたカマドが存在していたらしいが、第6号住居址によって破壊されている。カマド南には第2号住居址と共に平面形隅丸方形の非常に深い貯藏穴を有している。（図版13-3）又、本住居址の覆土中にはFA層を確認することができた。（図版13-2）



第41図 第7号住居址出土の土師器(1)



第42図 第7号住居址出土の土器(2)

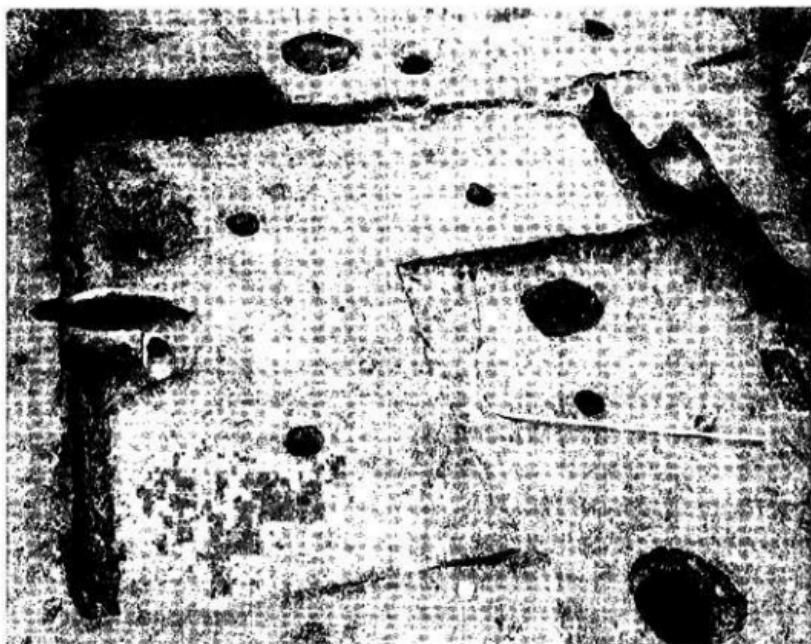
出土遺物（第41図、第42図）

第7号住居址からは甕3（第41図1、2、4）、小形甕1（第41図10）、壺1（第41図6）、鉢2（第41図3、5）、高杯2（第41図7、8）、杯18（第41図9、第42図11～27）が確認できた。内、壺1（第41図9）と小形甕（第41図10）は出土層位、出土地点とも不明なものである。

甕はやや大形の甕（第41図1）と小形甕（第41図2、4）、とに2分できる。甕（第41図1）は上半分のみが貯蔵穴内より確認された。口縁部はくの字に外反するものであり、外面には荒いハケ目痕が残されている。小形甕（第41図2、4）は、胴部が短かくやや張るものでんぐりした感じをうける。外面にハケ目を残し粗製のもの（第41図2）とナデによって調整されているもの（第41図4）とに2分できる。小形甕（第41図10）は口縁部は外反し胴部は中央よりやや上に最大径を有し、そろばん球状になるものである。器表の荒れが著しい。壺（第41図6）は大形のもので口縁部は欠損している。胴部の器表は非常に荒れている。鉢（第41図3、5）はちょうど小形甕の口縁部を切り取ったような形を呈している。口縁部は底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がるるものであり、内外面ともにヘラミガキの著しいもの（第41図5）と、厚手ではってしたもの（第41図3）とに2分できる。高杯（第41図7、8）はいずれも脚部のみであり、比較的小形のものである。調整はヘラミガキが著しい。杯（第41図9、第42図11～29）は、18点が確認されているが第41図9を除いて他はすべて床面密着か貯蔵穴内からの出土資料である。これらの杯は大きく5つに区分できる。それはまず、口縁部が所謂内斜口縁のもの（第42図21）。口縁部に棱を有さず、やや内湾ぎみに立ち上がる壺状のもの（第42図11、12）、口縁部が短かく、やや内傾するもので棱を有するもの。すなわち棱の位置が高いもの（第42図13、14）、胴部と口縁部との境に明瞭に棱を有するもの（第42図15～19、24）。胴部と口縁部との境に棱を有するが、その棱が凸状に張り出すもの（第42図25～27）の5者である。これらの杯は、FA層下の住居址である第2号、第4号住居址の杯と共に通するものと、第4号住居址FA層上の杯と共に通するものとの両者を有する組み合せである。

第7号住居址における遺物の出土状態は、ほとんどの資料が単体で出土しており非常に静的であるといえる。遺物の分布は貯蔵穴内及びその埋め土上面に集中している。

8) 第8号住居址

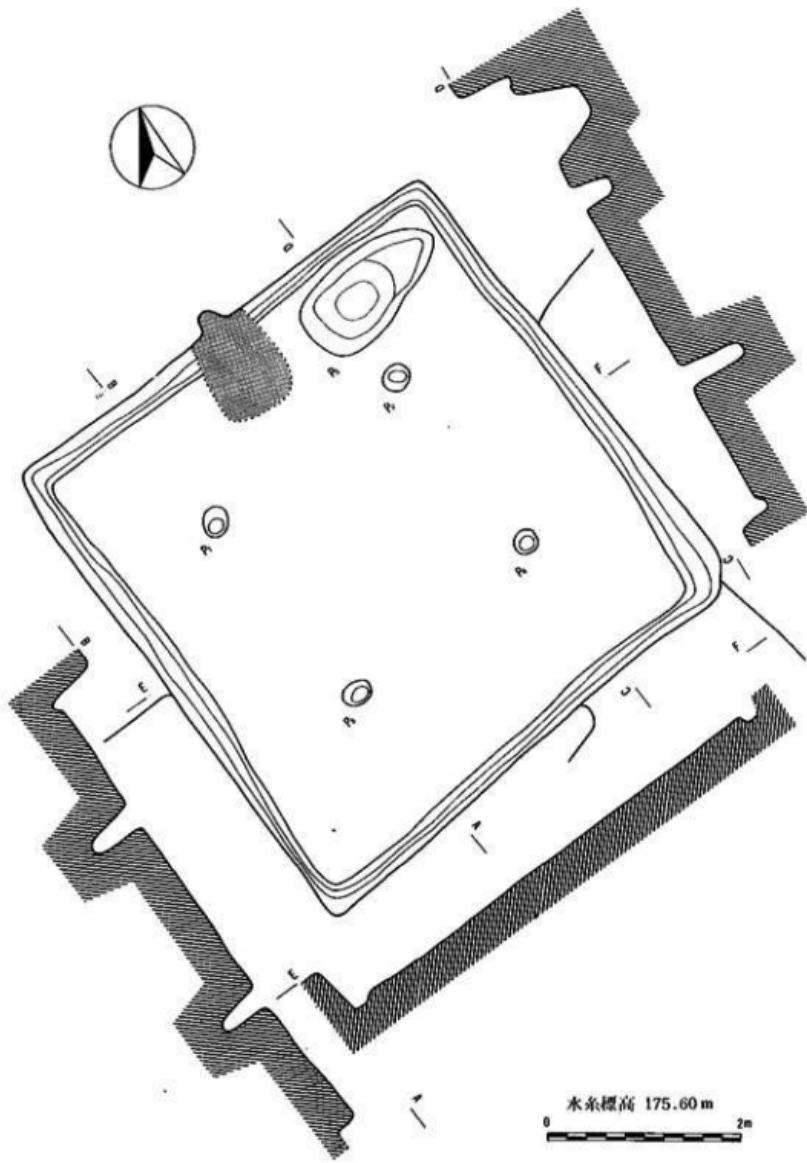


図版14 第8号住居址全景

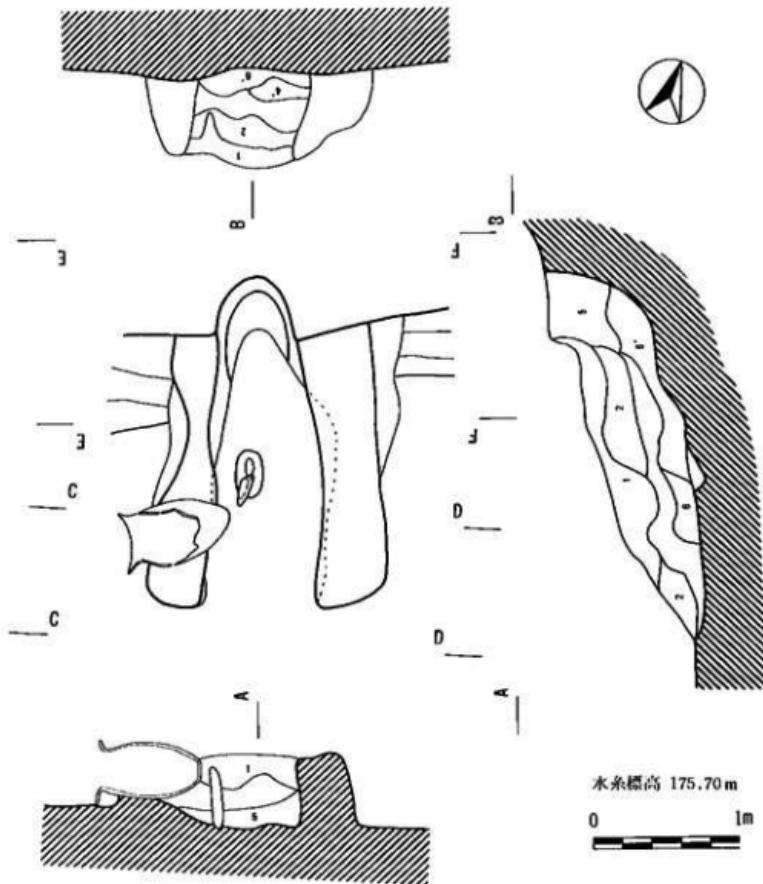
第8号住居址は、発掘区の西端に位置し、第7号住居址の一部を切り、第9号住居址の上に貼り床を施して構築されている。北壁中央に灰白色粘土を袖として用いて構築されたカマドが付設されている。

項目		項目	最大径 cm	最小径 cm	深さ cm
主 植 方 向	N 19° W	主柱穴 P ₁	31	24	55
		P ₂	30	13	40
東西方向の辺の長さ cm	540	P ₃	31	23	50
		P ₄	26	24	67
南北方向の辺の長さ cm	570	貯藏穴 P ₅	164	82	62
		P ₆			
壁 高 cm	50	P ₇			
		壁周溝	40	15	7

第9表 第8号住居址計測表



第43図 第8号住居址実測図

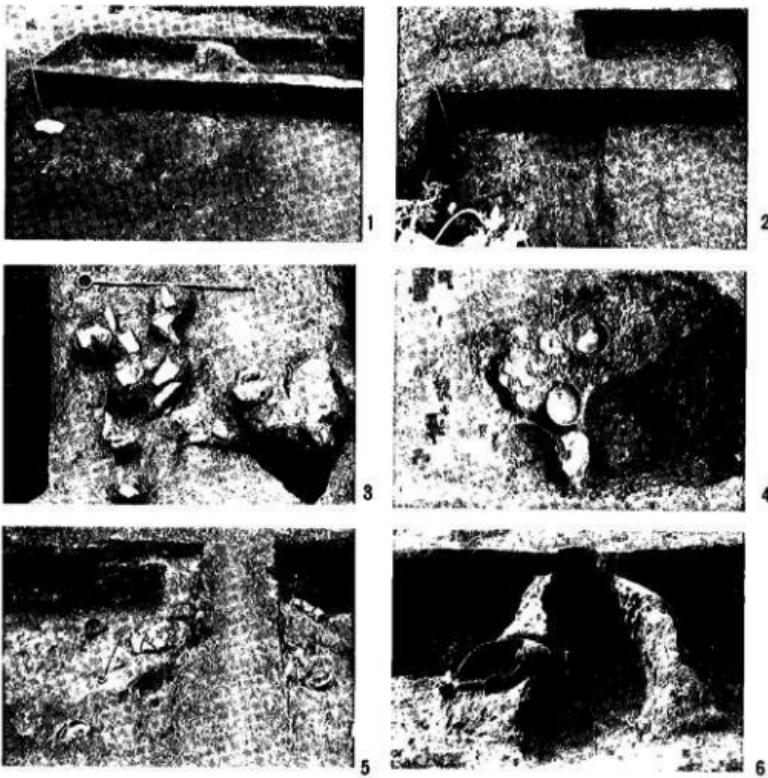


第44図 第8号住居址 カマド実測図

第8号住居址は壁下には壁周溝を全周させ、北壁中央にはカマドを有している。この東側には不整長方形のやや深い貯蔵穴をもうけている。主柱穴は4本が確認できた。

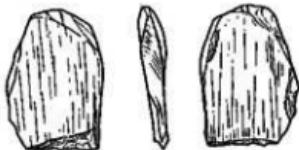
カマドは灰白色粘土を用いて構築されており、袖部は南北に長い。カマド内には石製の支脚を有している。又西側の袖部分には長脚化した櫛が横位の状態で出土した。

遺物の出土状態はすべてが床面密着の状態で出土し、その分布はカマド周辺、貯蔵穴、南壁よりもにかたよる傾向がある。遺物の出土状態はやはり単体で出土したものが多い。



図版15 第8号住居址の発掘

- 1) 第8号住居址の土層堆積状態。(南より)
- 2) 第8号住居址と第9号住居址との切り合い関係を示したセクション(南より)。図版右が第8号住、左が第9号住である。第8号は第9号住の上に貼床を施している。
- 3) 4)、5)は、住居址中央、貯藏穴内、カマド周辺の遺物出土状態である。
- 6) カマドの掘り上がり状態。長胴化した甕とそれを支えるようにカマド中央部に石製の支脚がみとめられる。カマド煙道部は住居北壁よりわずかに出る。

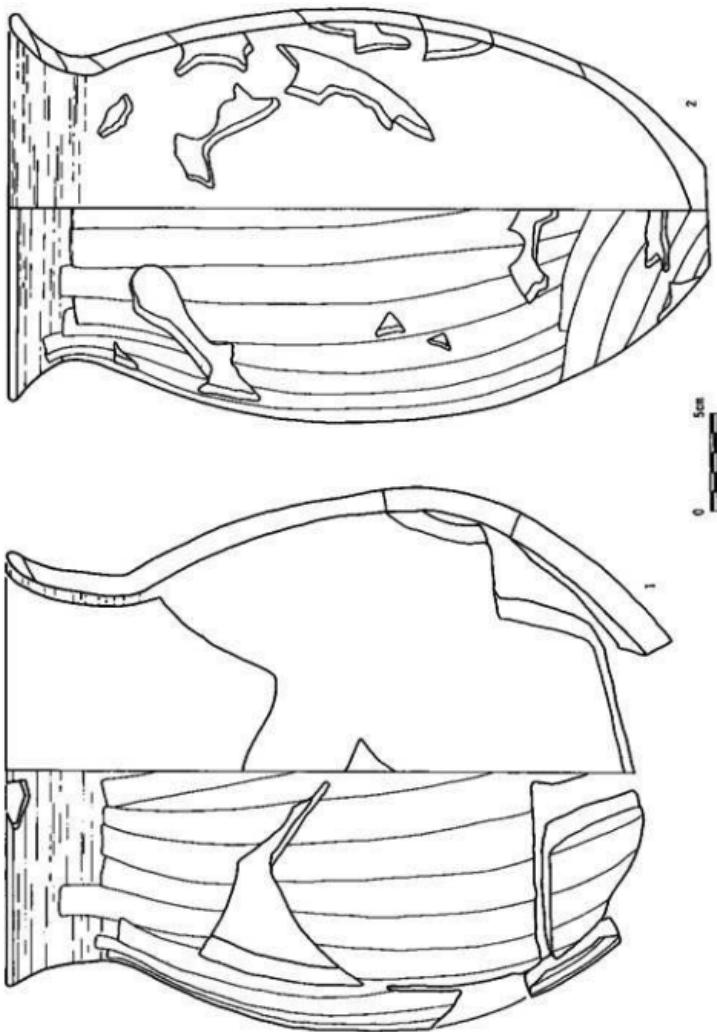


第45図 第8号住居址出土の砾石

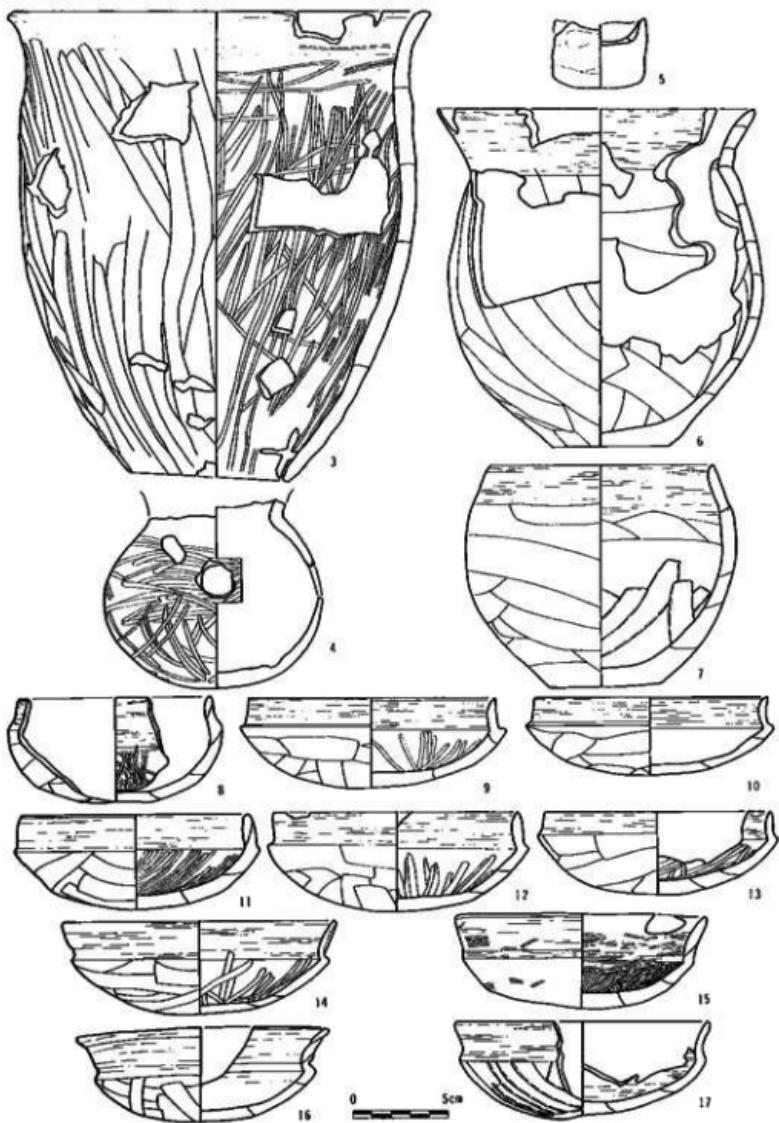
出土遺物（第46図～第48図）

第8号住居址出土のおもな遺物は、甕3（第47図1、2、第48図6）、鉢1（第48図3）、鉢1（第48図7）、壺1（第48図4）、環10（第48図8～17）、手捏ね土器（第48図5）1、砾石1（第46図）である。

甕（第47図1、2、第48図6）は大形の甕（第47図1、2）、と小形甕（第48図6）とに2分できる。大形甕（第47図1、2）は、非常に大形のものであり、長胴化している。口縁部はゆるやかに外反する。いずれも調整技法として縱方向のヘラケズリが卓越している。小形甕（第48図6）は口縁部はくの字に外反し、胴部中央より下位に最大径をもつものである。やはりヘラリズリが目立つ。鉢（第48図3）は、口縁部はゆるやかに外反し、胴部は中央に最大位を有している。外面の調整は縱方向のヘラケズリ、内面は細かな縱方向からのヘラミガキが施されている。鉢（第48図7）は器壁が厚手であり、底部よりゆるやかに内済しながら立ち上がる。口縁部は横ナデによって胴部との境にわずかに段をつくり区別している。壺（第48図4）は球形の胴部を有するもので口縁部は欠損している。胴部の孔は焼成前穿孔であるが、後にこの孔をひろげようとした痕跡がみとめられる。外面の調整は横方向のヘラミガキが施されている。環（第48図8～17）は、いずれも、口縁部と胴部との境に凸帯状に張り出した稜を有するものであり、稜より口縁部が直に立ち上がる（第48図8～13）と稜より口縁部が外反する（第48図14～17）とに2分できる。手捏ね土器（第48図5）は第5号住居址出土の手捏ね土器（第33図3、4）と共通するものであり、指頭の圧痕が明瞭である。砾石（第46図）は泥岩製の小形のものであり、断面くさび状を呈する。表裏とも作業面は作られている。

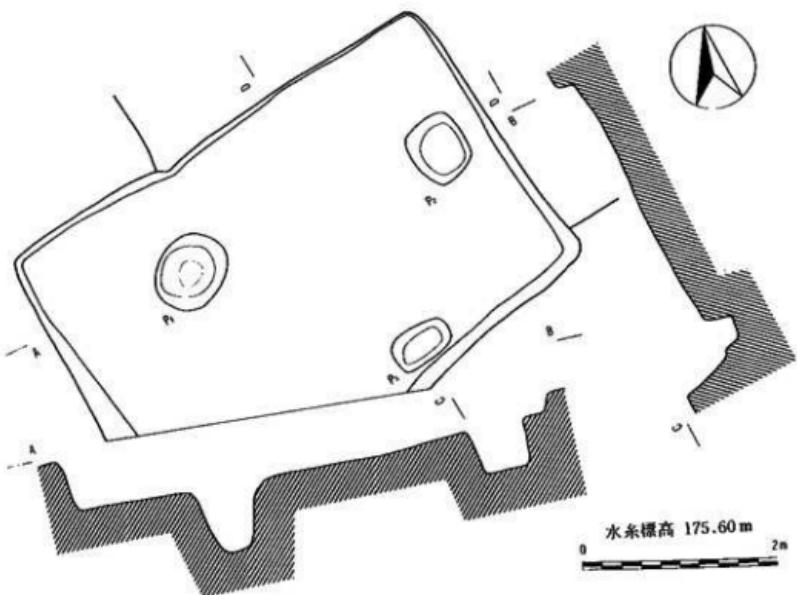


第47図 第8号住居址出土の土師器(1)



第48図 第8号住居址出土の土器(2)

9) 第9号住居址



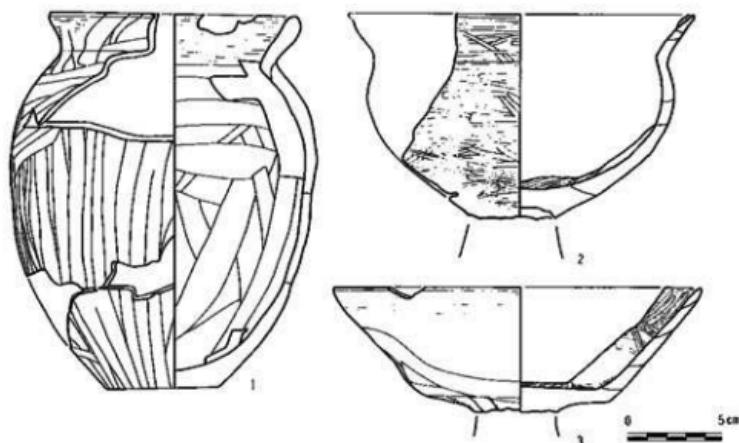
第49図 第9号住居址実測図

第9号住居址は発掘区の西端に位置し、第8号住居址によって一部を壊されている。第9号住居址は平面形は長方形を呈しており、比較的小形の住居址である。おもな施設としては、3本の主柱穴の他は炉址もカマドも確認されなかった。

住居址南壁の土層断面にはFA層を覆土上層に把握することができた。

項目		項目	最長径 cm	最短径 cm	深さ cm
主軸方向	N-22° E	主柱穴 P ₁	82	67	70
		P ₂	66	58	48
東西方向の辺の長さ cm	480	P ₃	64	38	23
		P ₄			
南北方向の辺の長さ cm	310	貯藏穴 P ₅			
		P ₆			
壁 高 cm	55	-			
		P ₇			
		壁周溝			

第10表 第9号住居址 計測表



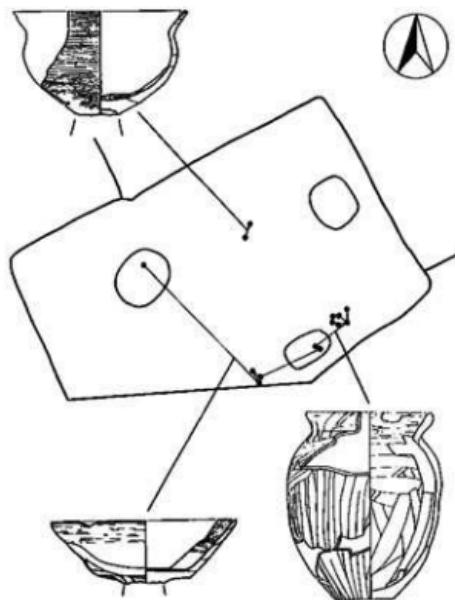
第50図 第9号住居址出土の土師器

出土遺物（第50図）

第9号住居址出土のおもな遺物は小形甕（第50図1）、脚付の鉢（第50図2）、高环（第50図3）である。この内、脚付の鉢と高环は脚部を欠失している。

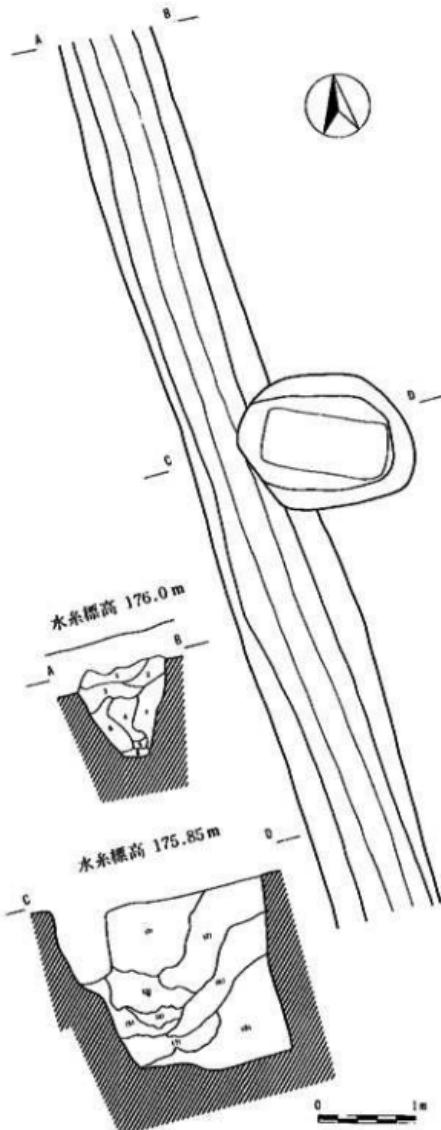
小形甕（第50図1）は口唇部が肥厚し、口縁部は頸部からくの字に短かく外反する。肩部は上半部、肩部に最大径を有する。器壁の厚さは均等に調整されていない。脚付の鉢（第50図2）は内斜口縁を有するものである。脚部は接合部より欠失している。高环（第50図3）は环部下部の棱が非常にはっきりしている。

遺物の出土状態は主柱穴内出土の遺物同志の接合がみられる。（第51図）



第51図 第9号住居址の遺物分布

10) その他の造構と遺物

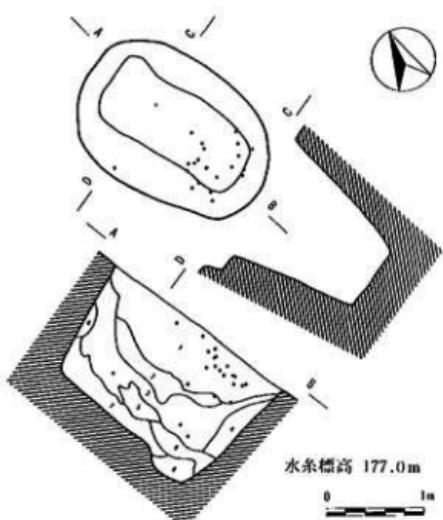


前田遺跡からは前述の9軒の古墳時代の住居址群の他に1条の溝と2基の土塙を確認した。

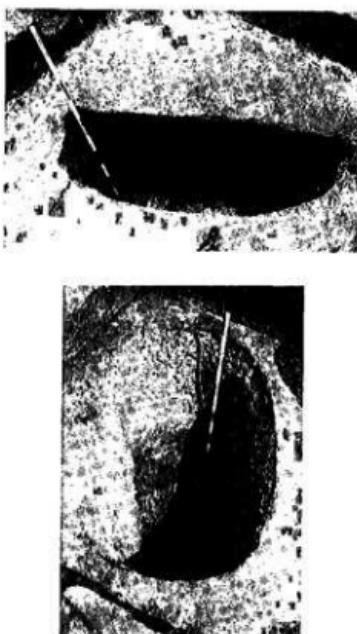


図版16 1号溝と1号土塙実測図

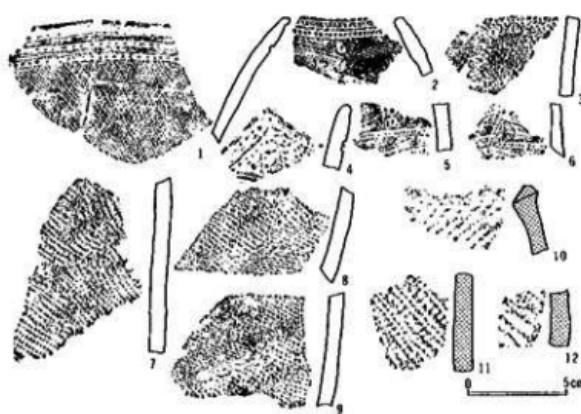
第52図 1号溝と1号土塙実測図



第53図 2号土城実測図



図版17 2号土城の発掘



第54図 第2号土城出土の縄文土器

1号溝（第52図）は第3号住居址と第2号住居址との間に確認されたものである。溝の走向はN-9°-Wを示す。上巾110cm、下巾30cmを計る。溝の断面形は薬研に近い。出土遺物はまったく発見できなかった。又覆土中には火山灰も確認できなかった。

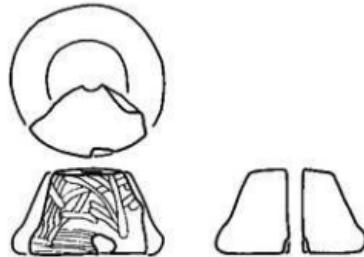
1号土城はこの1号溝の北面に確認されたもの

であり、深さ180cm、長径180cm、短径120cmを計り、平面形は長楕円形、底形は隅丸長方形を呈する土塙である。出土遺物は縄文土器と思われる土器の細片が上層中に確認できた。

2号土塙(第53図)は第4号住居址と第6号住居址との間に確認された。深さ140cm、長径200cm、短径150cmを計る。第1号土塙と同様、平面形は長楕円形、底形は隅丸長方形を呈するものである。2号土塙からは第54図に示す縄文土器が確認できた。出土状態は第53図に示す通りであり、かなり上面で確認されている。

この1号土塙と2号土塙は土塙内覆土の状態、平面形などから考えて同時期に属するものと考えられる。一応、2号土塙内の出土遺物などから判断して縄文時代前期後半のものとしておく。

第55図に示したものは、前田遺跡から表採された土製の紡錘車である。全体の4分の1程が残存している。



第55図 前田遺跡表採の紡錘車

IV 前田遺跡調査の意義と問題点

1) 遺構について

本遺跡から今回発見された遺構は、住居址9軒、土塙2基であった。この内、2基の土塙は出土遺物から判断して明らかに古墳時代より以前のものと考えられる。ここでは、この土塙を除く、古墳時代に帰属するものと考えられる住居址についてまとめておきたい。

調査を行った9軒の住居址は、いずれも方形を基本とした堅穴式住居址である。これら9軒の住居址は、それぞれの住居址が有するさまざまの要素から分類が可能である。

第2号住、第4号住、第7号住の各住居址は、平面形は、ほぼ正方形に近く、住居址の主軸方向をほぼ東にもつ。カマドは、東向き、両側に石を用い、ロームブロックで据及び天井部を構築している。又、南東隅には、隅丸長方形の深い貯蔵穴を有し、壁周溝を全周させている。さらに、住居址内覆土中に確認されたFA層の堆積状態なども、かなり類似している。以上のことより、これらを一群としてとらえることができよう。——イ群——

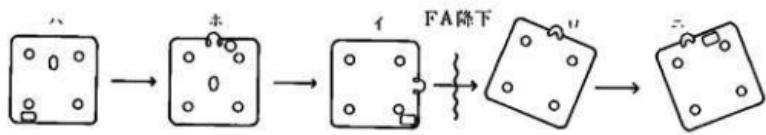
第5号住居址と第6号住居址については、住居址の全掘は行えなかったが、主軸方向あるいは、出土遺物などから一群をもうけられよう。——ロ群——

第3号住居址と第9号住居址は、住居址内にカマドを有しないということにおいて共通する。特に第3号住居址は、住居址中央に地床炉をもつことから、前述のイ・ロ群よりも古い様相をもっているものとして理解したい。ただ、柏川周辺において発見されている所謂、和泉式土器を出土する住居址の貯蔵穴の形態は、円形が一般的である点などを考慮するなら、むしろ、前述の2群に近いと言えるかもしれない。この第3号住居址と第9号住居址をまとめて、ハ群とし、本調査区中最も古い時期の一組として理解したい。——ハ群——

第8号住居址は平面形はほぼ正方形、主軸方向は北西、カマドは北向き、灰白色粘土をカマド脇として使用している。北東隅には、隅丸長方形の浅い貯蔵穴を有している。この住居址はカマドの形態、第5号住、第7号住、第9号住の各住居址の切り合い関係などから判断して、本調査区中最も新しい時期に比定されるものと考えられる。——ニ群——

第1号住居址は平面形は正方形、主軸方向はほぼ北、北壁には、石を芯としたカマドを有し、住居中央部には、地床炉も設けている。カマド脇には、円形の貯蔵穴を有している。又、この住居址で特筆されることとして、入口状の施設を有していることがあげられる。——ホ群——

以上、本遺跡の住居址は、イ～ホの5つに分類することができる。これらの変遷を考えると、ハ→ホ→イ→ロ→ニという変遷が想定できる。この中でイ群とロ群、ニ群との関係は、第7号住居址と第8号住居址との切り合い関係、第7号住居址と第6号、第5号住居址との切り合い関係から、層位的に検証され得るものである。又、ハ群とニ群との関係も、第9号住居址と第8号住



第56図 住居址の変遷

居住との切り合い関係から明らかである。

2) 出土遺物について (第57図)

ア. 土師器

本遺跡からは、多くの土師器が発見されている。しかし、須恵器については認めることができなかつた。この現象は、当地域の時代的な特徴であろうか。ここでは、すでに述べてきた土師器群について総括しておきたい。

本遺跡から確認された土師器は、壺、甕、瓶、高壺、壺、塊、鉢、堆、甕の9器種に分類できる。これらのうち、甕、瓶、堆は、相対的な大小の違いによって2つに分けることができる。つまり、この遺跡では、土師器群を9器種15種に分けて考えることができる。

これらの器種のうち、壺、塊、甕は、それぞれの一括出土遺物中、最も明瞭にその変化を把握することができる。この壺、塊、甕の変化を一つの指標として、本遺跡出土の土師器をⅠ類からⅢ類までに区分する。

Ⅰ類

壺 脊部は、底部から直線的に開き、口唇部近くにあって直に立ち上がり、口縁部を形成する。そのため、かなり高い位置に接を有することとなる。(注1)

塊 底部から内済ぎみに立ち上がり、口縁部は、わずかに屈曲を有し外反する。所謂「内斜口縁」を有するものである。この塊の器形は、つぎのⅡ類に引き継がれていく。

甕 口縁部は、狭く、頸部から「くの字」に屈曲する。脛部は、球形に張る。この器形は、和泉期の伝統を有するものとして理解できる。

このⅠ類とした土師器群は、所謂、須恵器の模倣壺出現前の段階として把えられる。壺、塊類の平底もこの時期の特徴としてあげられよう。さらに、一括出土資料中には、小形堆等も認めることが出来る。これらのことより、このⅠ類を前段階の土器群の伝統を強く受け継いだものと理解したい。

Ⅱ類

壺 所謂、須恵器模倣壺がみられる。これも一般に言われるよう須恵器の壺蓋の模倣とされるものが、ここではじめて出現する。さらに若干の時間差をもって須恵器の壺身の模倣壺が出現していく。(注2)

塊 I類に近似するが、大形のものなどが現われる。又、これは、环にも共通する特徴であるが、平底がなくなり、丸底が一般化する。

塊 長胴甕が出現する。しかし、ここでの長胴甕は、器面の調整にハケ目を多用している。又、この長胴甕の他に、I類と同様に胴部の張る広口の甕も認められる。

このII類は、所謂、須恵器の模倣环の出現の段階としてとらえられよう。さらに新たに長胴甕や瓶などの新たな器種が加わる段階でもある。

III類

塊 須恵器の环身模倣环の他に、この环より型式的に変化したとも考えられる环がみとめられる。

塊 長胴甕一色となる。調整技法は、ハケ目がまったくなくなり、タテ方向の荒いケズリが顕著となり、器壁も薄くしあげられている。

以上、I類からIII類は、第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址、第7号住居址覆土中におけるFA層の状況や、第4号住居址におけるFA層を挟んでの土師器の出土例、さらには、第7号住居址と第8号住居址、第6号住居址、第5号住居址との切り合い関係などの層位的な検討から、時間的な変遷を示しているものと考えられる。すなわち、このI類からIII類土器は、前田遺跡における一つの時間的示準としてとらえることができ、そのまま、Ⅰ期～Ⅲ期と言いかえることができる。

イ. 土製品

本遺跡からは、非常に特異な形態をもった土製品が4例確認されている。第2号住居址上層から1例、第5号住居址床直より3例が確認されている。（第18図-26、第33図-6、7、第34図-8）

これらの土製品は、いずれもその整形技法、形態的特徴は共通するものがある。それはまず、胎土は、ほとんど精製されず、小蝶等を多く含むものであること。土器外面はタテ方向の荒いヘラケズリで調整が行なわれ、内面は、輪積み痕とそれを調整している指頭压痕を明瞭に残していること。さらに形態的な特徴として平面形は長方形、断面は上下につぶれた楕円形を呈することなどである。

これらの土製品については、現在まで県内での出土例は、他に確認されていない。県外でも類例をみないが、あえてあげるとすれば、八王子中田遺跡で円筒形土製品とされたものがあげられようか。ただ、中田例は、カマドの煙道として用いられているとのことであり、断面も円形に近く、本遺跡例が、上下端部を押しつぶしているのに対して、あくまでも、円筒形の土管状のものであるという点において大きく異なる。

さて、この土製品の用途を考えるには、その出土位置と土器表面に残されたススの付着状態に

注目したい。第5号住居址からは、3例が確認されているが、この住居址のカマドは、かなり崩壊した状態が認められ、この周辺から2例が、確認されている。さらに、その土製品を観察すると、片面に斜め方向のススの付着が認められる。（第33図-6、7） 第34図-8には、片面全面にススの付着が認められた。以上のことから、これらの土製品は、カマドの焚き口部分を構成したものではないかと考えられる。この土製品の出現は、土製支脚等の出現とも期を一にして、カマドの形態的整備の一端階の指標としてとらえられないだろうか。以上、これらの土製品については、類例をまって言及したい。

3)まとめ

今回の報告では、確認された住居址をそれぞれの特徴から5つの群に分け、又、その住居址からそれぞれ出土した土師器群について3細分を行った。これをまとめたものが、第57図である。これによると、本発掘区では、3回の住居址群の推移が予想できる。

今回の調査は、道路敷という狭い範囲に限られ、集落に1筋のトレンチを入れたに過ぎない。この地域に生活していた人々の生活をより鮮明にするには、生産域、墓域等を含めた集落の構造的な理解が必要であり、このような視点での今後の発掘調査や周辺地域の踏査をさらに進めたいと思う。

注1) この环は、柏川地域では、多くみられるものである。最近の調査例では、この环を含むセットに須恵器の把手付きの大彩瓶が共作した例がある。

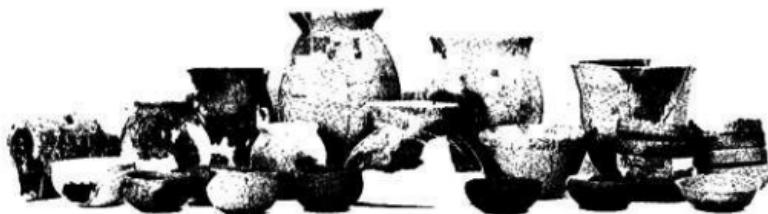
注2) 須恵器16蓋、环身それぞれの模倣环といわれるものについては、前者が、後者に先んじて出現すると謂われている。

これは、本道跡中、第4号住居址におけるFA層を挟んでの上層からの环身模倣环の出土、下層床面からの环身模倣环の出土という出土例も、証明しているように思われるが、第7号住居址の出土例からは、FA層下の住居床面直上からの両者の共存がとらえられた。このことから、この环蓋、环身の模倣环の入り方については、それはどの時間的な順位がないものと考えたい。

図 版



1 住



2 住



3 住



4 住

図版18 住居址出土の土師器(1)



5 住



6 住



7 住



8 住



9 住

図版19 住居址出土の土師器(2)



図版20 第1号住居址出土の土師器



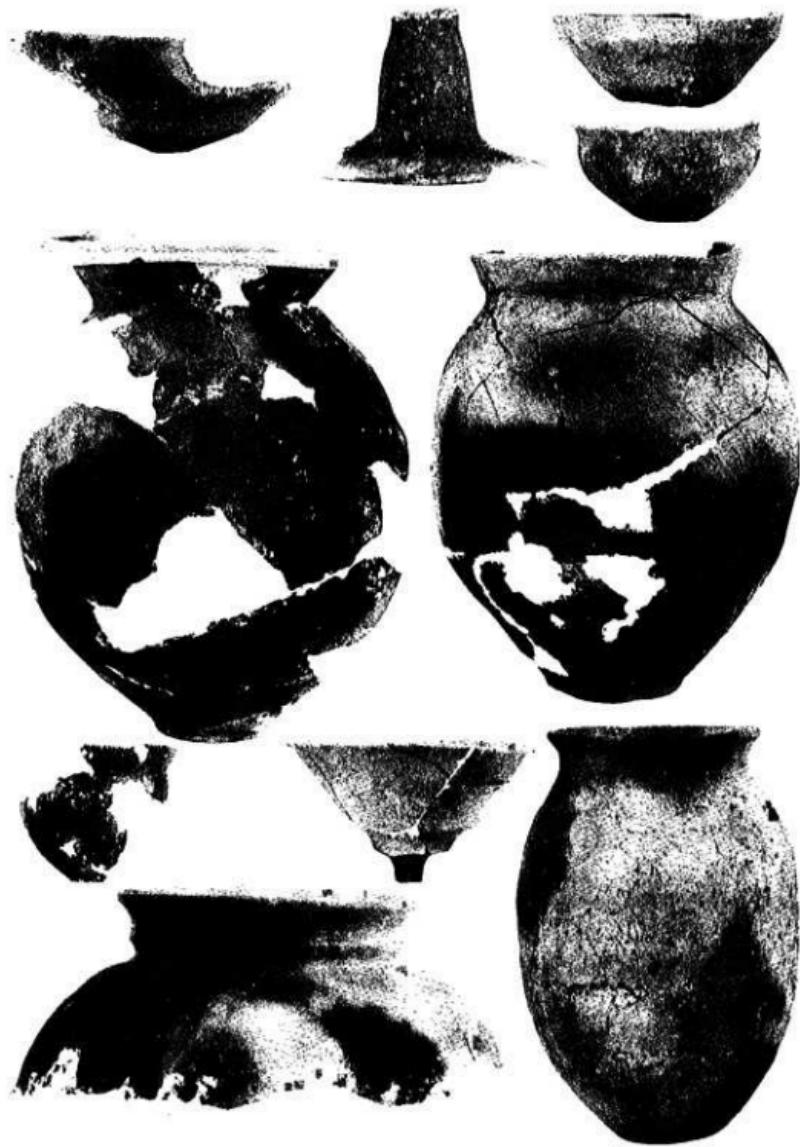
図版21 第1号住居址出土の土師器



図版22 第2号住居址出土の土師器



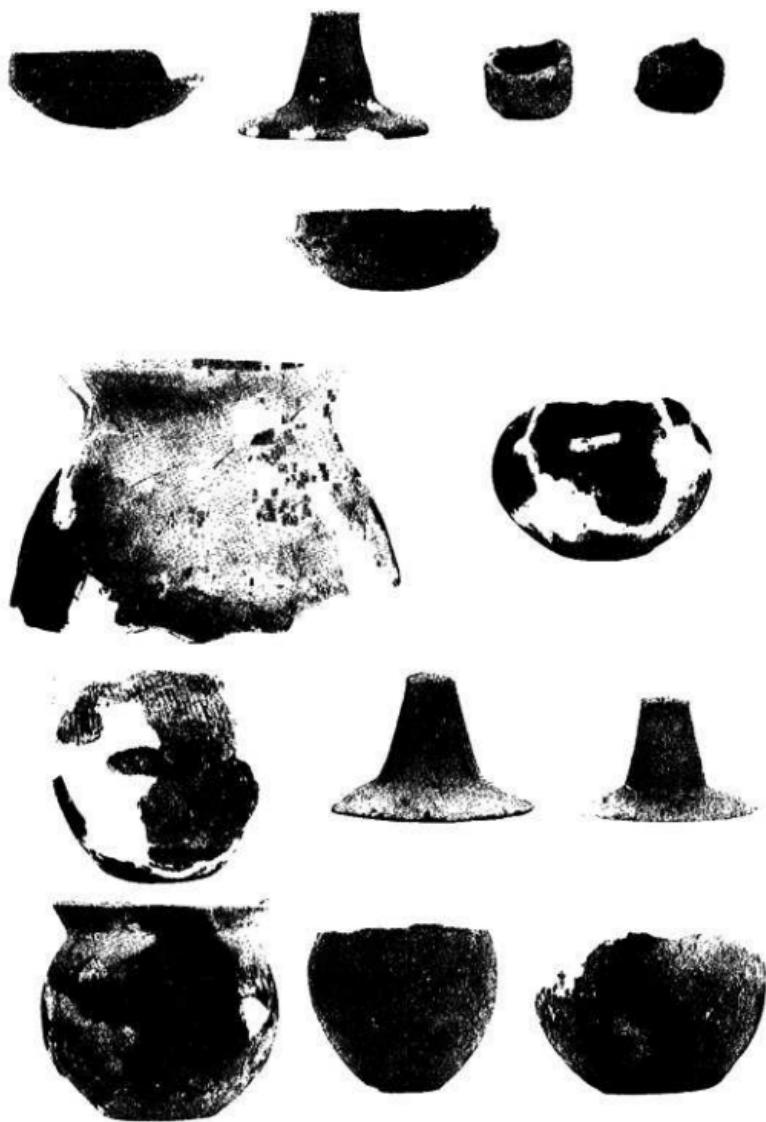
図版23 第2号住居址出土の土師器



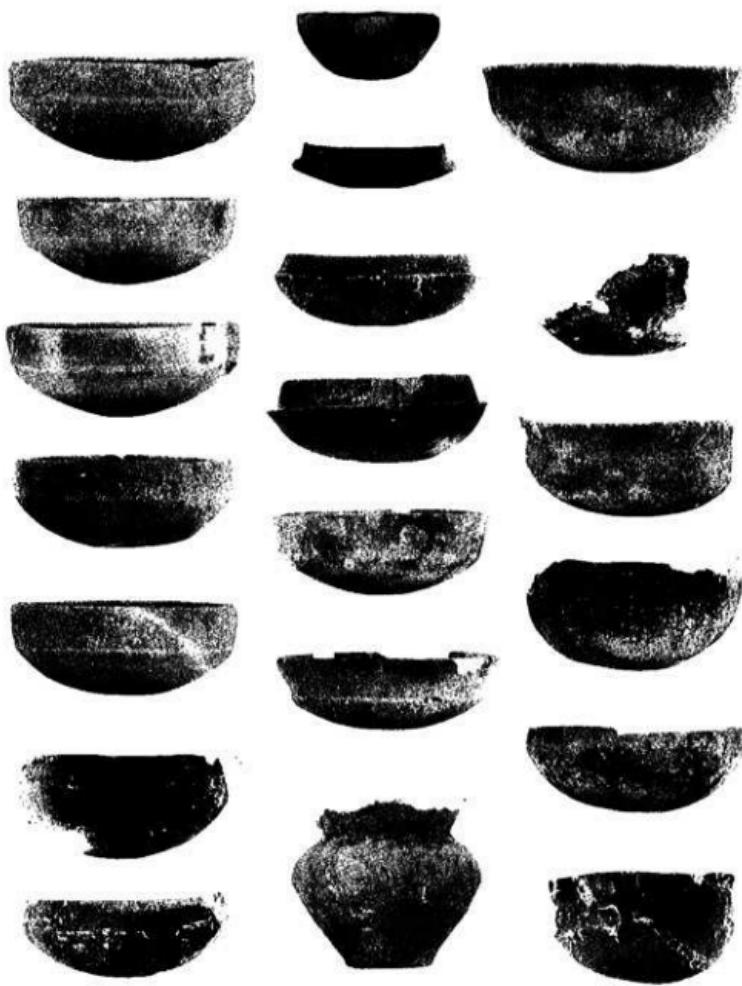
図版24 第3号住居址、第4号住居址出土の土師器



図版25 第4号住居址出土の土師器



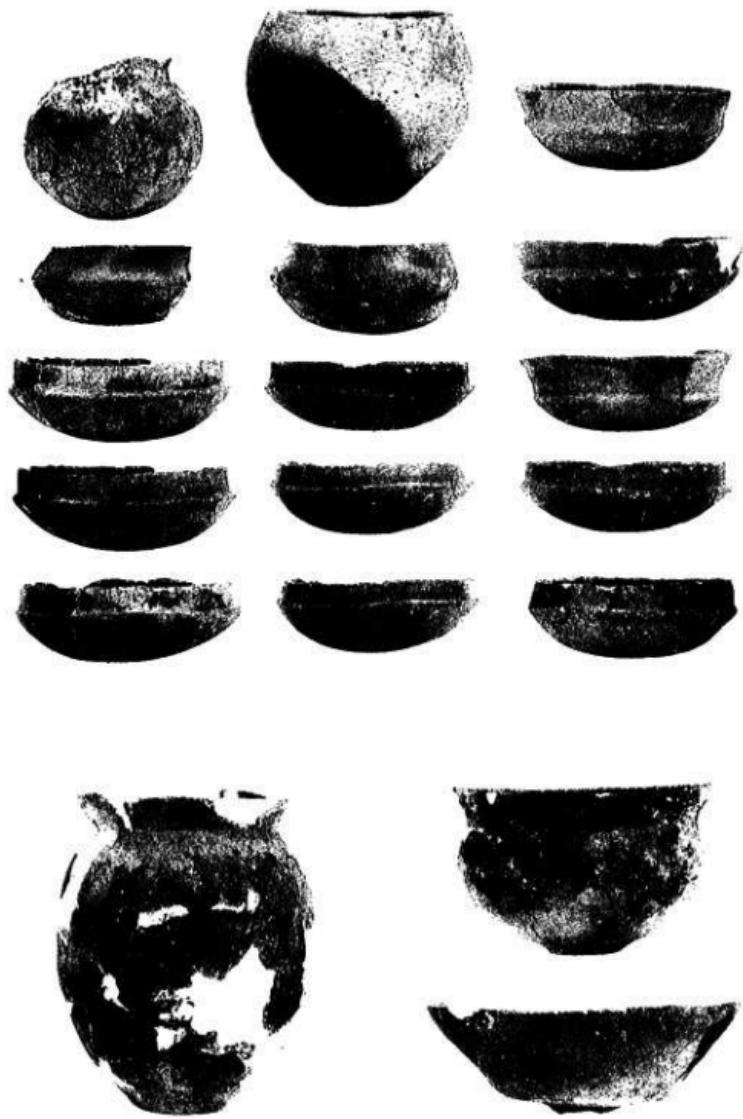
図版26 第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址出土の土師器



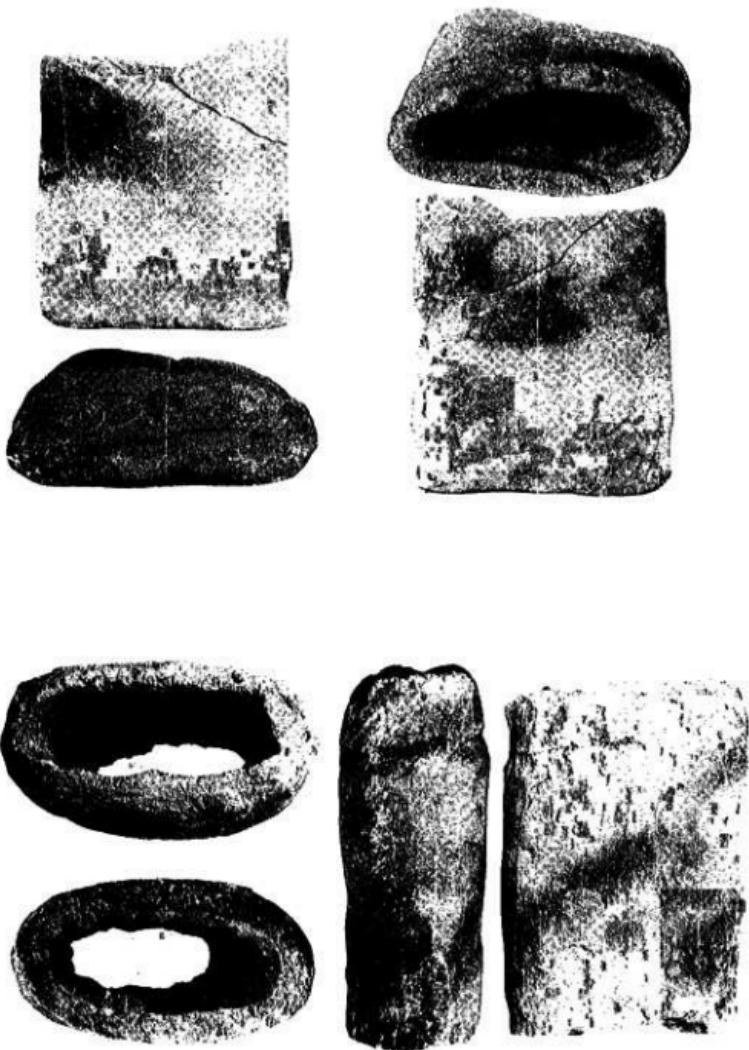
図版27 第7号住居址出土の土師器



図版28 第8号住居址出土の土師器



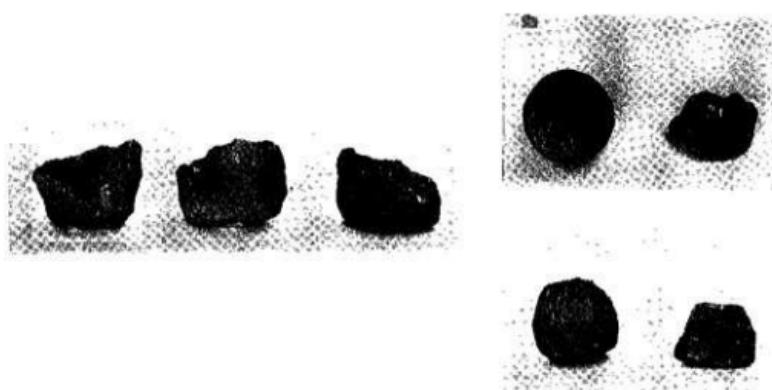
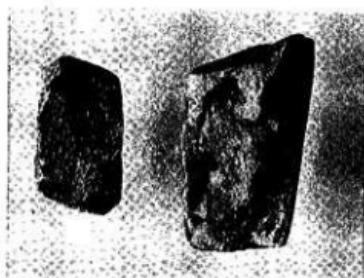
図版29 第8号住居址、第9号住居址出土の土師器



図版30 第5号住居址出土の土製品



図版31 第5号住居址出土の土製品



図版32 前田遺跡出土の滑石製品及び土製品、砥石

前田 F 1
柏川村文化財報告第 2 集

発行日 昭和58年4月20日
編集発行 柏川村教育委員会
群馬県勢多郡柏川村西田面194
印刷者 小林印刷所

土 器 觀 察 表

辨別番号	器形	器形の特徴	調査整		備考
			外面	内面	
四-1a	器種 器高 口径 底径				残存率 色調 胎土 焼成 その他
7-1	壺 31.5 7.5	球形の胴部を呈し、胴中央やや上に最大径を持つ。	頸部はヨコナデで、胴上部にヘラナデ、胴中部、下部は摩減により不明。	摩減、剥落により不明。	3/4、 淡褐色、 雲母を少量混入、普通
7-2	瓶 32.5 25.0 (孔)8.8	口辺部は「く」の字に外反し、胴部はゆるやかな丸味を持ち、底部を呈す。	胴部概方向のハケメの後、口辺部はヨコナデ、胴部はタテ方向のヘラミガキ。	下から上へのタテ方向のヘラミガキの後、口辺部はヨコナデ。	ほぼ完形、 淡褐色、 砂粒若干混入 普通
8-3	壺 19.0	口辺は輪広くゆるやかに外反し、最大径は胴上部に有り、ゆるやかな丸味を持ち、底へと続く。	口辺部はヨコナデの後、上下方向の速状暗文。胴上部はナデの後、上下方向の速状暗文、胴中部から下部にかけてはヨコ方向のヘラケズリ。	口辺部ヨコナデの後、上下方向の速状暗文、胴部指ナデ。	底部欠損、 淡褐色、 砂粒を若干混入 普通
8-4	甕 (16.8)	口辺部は「くの字」に強く外反し、胴部は球形を呈す。	口辺部はヨコナデ、胴中部から下部にかけてはヨコ方向、右一左へのヘラケズリ。	口辺部はヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	1/3、 赤褐色、 砂粒を若干混入 普通
8-5	壺 4.8 15.0 4.6	直立した短い口辺部から直線的に底部に至る。底部はやや上げ底を呈す。	口辺部はヨコナデ、底部はヨコ方向のヘラケズリ。	口辺部ヨコナデの後、底部を中心とした放射状のヘラミガキ。	完形、 赤褐色、 砂粒を若干混入 普通
8-6	壺 5.8 14.3 4.0	やや内湾ぎみの口辺部からゆるやかに平底の底部に至る。	胴部から底部にかけて、ナナメ方向を中心とした不規則なヘラミガキ、底部はヘラミガキ。	ナナメ方向のヘラナデ?	2/3、 淡褐色、 砂粒雲母を少量混入、 普通
8-7	壺 6.0 3.4	胴部は内湾ぎみに立ち上がり、頸部のくびれをほとんど有さず、口辺部はゆるやかに外反。	胴部はヨコ方向を中心としたヘラケズリ、その後口辺部ヨコナデ、底部ヘラミガキ。	口辺部ヨコナデ、底部を中心とした不規則なヘラミガキ。	1/2、 赤褐色、 砂粒を若干混入 普通
8-8	壺 5.2 9.6 5.0	やや上げ底の底部から直線的に立ち上がり、口辺部でやや内湾する。	口辺部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	口辺部ヨコナデ? 脇部から底部にかけてヘラナデ。	2/3、 淡褐色、 小理、砂粒を少量混入、 普通
9-9	高壺 14.6 18.0 (裾部)13.0	壺部は棱を有し、脚部は若干のふくらみを持つ。裾部は「八」の字状に大きく聞く。	壺部は口辺にヨコナデの後、下から上方に向へのヘラミガキ。脚部は脚部にヨコナデの後、上から下方に向のヘラミガキ。	壺部は口辺にヨコナデの後、方射状のヘラミガキ、脚部は柱状部においてヨコ方向のヘラケズリ、脚部はヨコナデ。	壺部5/6、裾部2/3、貯藏穴内赤褐色、砂粒を若干混入 普通
9-10	高壺 13.4	壺部は2段の棱を有し、脚部は柱状部中央でややふくらみを持つ。裾部は有段を呈す。	壺部はヨコナデ	壺部はヨコナデ	3/4、 淡褐色、細い砂粒を多量に混入、 普通

持因番号	器 形	器 形 の 特 徴	調 整		備 考
			外 面	内 面	
9-11 19.3	高 环	环部はゆるやかな棱を有し、口縁はゆるやかに内湾する。	环部は口縁部ヨコナデの後、下から上方に向へのヘラミガキ。	环部、口縁部ヨコナデの後、放射状にヘラミガキ。	环部1/8、上層淡褐色、砂粒を少量混入普通
9-12 20.3	高 环	环下部に棱を有し、口縁はゆるやかに内湾する。	环部はタテ方向へのラナデの後、口縁部ヨコナデ。	环部、口縁部ヨコナデの後、放射状にヘラミガキ。	环部3/4、上層赤褐色、砂粒を少量混入普通
9-13 19.6	高 环	环下部に棱を有し、口縁はゆるやかに内湾する。	磨成(ヘラミガキらしき痕跡を残す所あり)	口縁部ヨコナデ。	环部3/5、床直砂粒を若干混入普通
9-14 (据部)16.8	高 环	柱状部はゆるやかに広がり、据部は「ハ」の字状に大きく開く。	据部ヨコナデの後、柱状部から据部にかけてヘラミガキ。	柱状部(指おさえか?) 据部(ヨコナデ)	脚部のみ1/3、上層淡褐色、砂粒を若干混入普通
9-15 (据部)13.4	高 环	柱状部はふくらみを持ち、据部は「ハ」字形に大きく開く。	据部ヨコナデの後、脚部全休にわたり、タテ方向へのヘラケズリ。	柱状部横方向のヘラケズリの後、据部はヨコナデ。	脚部のみ1/2、床直淡褐色、砂粒を若干混入普通
9-16 (据部)15.3	高 环	脚部は柱状部で直線的に広がり、据部は「ハ」字形に大きく開く。	据部ヨコナデの後、柱状部から据部にかけてタテ方向へのヘラミガキの後、据部ヨコ方向へのヘラミガキ。	据部ヨコナデ、柱状部しばり。	脚部のみ1/2、床直淡褐色、砂粒・雲母を若干混入普通
9-17 14.6cm	高 环	脚部は柱状部で直線的に広がり、据部は「ハ」字形に大きく開く。	据部ヨコナデの後、柱状部から据部にかけてヘラミガキ。	据部ヨコナデ	3/5、上層赤褐色、砂粒を若干混入普通
10-18 17.9 13.4 4.9	卅	胴部は球形を呈し、最大幅は胴中央よりやや上方にある。頭部はよくしまり、口縁部は棱を有し上部は垂直ぎみに立ち上がる。	口縁部はヨコナデ、胴部はヨコ方向へのラケズリ(一部その後に指ナデ)、底部へラケズリ。	口縁部ヨコナデ。	ほぼ完形、貯藏穴内赤褐色(部分的に黒斑)砂粒を若干混入普通
10-19 13.0	卅	頭部はよくしまり口縁は直線的に立ち上がり、上方でゆるやかに内湾する。	口縁部は口唇部ヨコナデの後、上下方向の暗文を有す。	口縁部上方ヨコナデの後、上下方向の暗文を有す。	1/4、床直淡褐色、砂粒を若干混入普通
10-20 9.8 10.1 3.2	卅	最大径は口縁部端に有る。胴部は中央部で強く張り出し、頭部は良くしまる。口辺部は直線的に立ち上がり、上方で若干内湾する。	口縁部はタテ方向へのラナデの後、上方はヨコナデ。胴部上方はタテ方向へのラナデでその後、底部にかけてヘラケズリとヘラナデ。	口辺部はヨコ方向へのラナデの後、上方はヨコナデ。	3/4、床直出褐色、砂粒を若干混入や不良
10-21 7.9 8.0 3.4	卅	胴部は球形を呈し、口縁部上方の後の胴部怪がねは等しい。口縁部は直線的に立ち上がり上方でゆるやかに内湾する。底部はやや上げ底である。	口縁部はヨコナデ、底部から胴部にかけてはヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、口縁部ヨコ方向へのラナデ。	1/2強、赤褐色、砂粒を若干混入普通

標図番号	器形	器形の特徴	調 整		備 考
			外 面	内 面	
15-1	甕 33.5 17.5 6.0	口縁部は「くの字」状に外反し、胴部は丸味をおり、長胴で最大径は胴中央に有す。口唇部がやや厚い。	胴部はタテ方向のハケメ。その後、底部にはヨコ方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は縱方向のハケメの後、胴上部はヘラナデ、中部はヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。	脚7/8、底1/5、床直淡褐色、砂粒を多量に混入、普通
15-2	甕 22.0 16.0	口縁部は若干の後を有しゆるやかに外反する、胴部の張りは弱く、最大径は中央部にある、長胴化のきざしがうかがえる。	口縁部下方から胴部上部にかけてタテ方向のあらいハケメ、その後胴上部から胴中部にかけて細い右下りのハケメ、最後に口縁部ヨコナデ。	胴上部にハケメの後、胴部全体にナナメ方向のヘラナデ?、口縁部はヨコナデ。	ほぼ完形、床直淡褐色、砂粒を若干混入、普通
15-3	小形甕 12.4 20.5 6.9(孔2.6)	折返し口縁部を有し、やや小形の鉢形で単孔を呈す。底部に若干くらみを有するが、ほぼ直線的に立ち上がる。	胴部はヨコ方向のヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。	口縁部は指頭による圧痕の後、ヨコナデ底部から口縁部方向にナナメ方向のヘラケズリ。	ほぼ完形、床直淡褐色、砂粒を多量に混入、普通
15-4	小形甕 15.9 12.3 6.3	口頭部は「くの字」状に短く外反する。胴部は球形を呈し、最大径は中央部に有る。	口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	口縁部はヨコナデ	2/3、床直赤褐色(黒斑が多い)
15-5	瓶 23.1 24.0 8.8	口縁部はゆるやかに外反し肉厚である。胴部は丸味をもった砲弾形を呈す。	胴部はナナメ方向のヘラミガキ、口縁部はヨコナデ。	口縁部ヨコナデの後、ナナメ方向のヘラミガキ	ほぼ完形、床直淡褐色(部分的に黒斑)砂粒を若干混入、普通
16-6	壺 16.0	胴部は球形を呈し、口縁は「くの字」形に外反し、ゆるやかな段を呈す。口唇部は方形状である。	頭部から口縁部にかけてヨコナデ。	胴部はヨコ方向を中心としたハケメ。その後頭部から口縁部にかけてヨコナデ。	1/8 淡褐色、砂粒を若干混入、普通
16-7	甕 (20.1)	頭部から口縁部は「くの字」形に強く外反する。	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	1/8、上層赤褐色、砂粒を若干混入、普通
16-8	甕 20.0	胴部は張りはやや少なく、胴中央部に最大径を有す。口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部はヨコナデ、その後胴上部ヘラナデ、胴中部から下部にかけてナナメ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴下半部ヨコ方向ヘラケズリ。	1/2、床直淡褐色、砂粒を若干混入、普通
16-9	小形甕 13.0 10.6 4.4	口縁部は短かく、やや外反する。頭部内面にはするどい後を成す。胴部は上半に最大径を有する。底部は小さな平底を有する。	口縁部はヨコナデ、胴上半部は器形の倒落が著しい。胴下半部は胴上半から下方へのヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴下半部は済減が著しい。	3/5、淡褐色、砂粒を含む、普通
16-10	壺 7.7 14.5 4.9	口縁部は短かく、外反する。所謂「内斜口縁」を有する。口縁内側には稜を有する。底部は小さくやや上げ底状を呈する。	口縁部はヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	完形、床直淡黄褐色、砂粒を若干混入、普通

持物番号	器 形	器 形 の 特 徴	調 整		備 考
			外 面	内 面	
16-11	塊 7.4 10.6	所謂「内斜口縁」を有する。口縁部は直に立ち上がる。内面には稜を有せず、内面に棱をもつ、底部は丸底を呈する。	口縁部ヨコナデ、頸部タテ方向のハケメ 底部はヨコ方向のヘラケズリの後ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ、 底部は剥落が著しい。	完形、赤褐色、床直 小螺を含む普通
16-12	塊 6.4 10.1	所謂「内斜口縁」を有する。口縁部は直に立ち上がるが内面にのみ棱を有する。底部は丸底を有する。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラナデの後、放射状の暗文が見られる。胴部は剥落が著しい。	完形、赤褐色、床直 砂粒を含む普通
16-13	塊 7.2 11.2	口縁部は短く、外反する、胴部は球形を呈し、底部は丸底となる。	口縁部ヨコナデ、胴部から底部はヨコ方向のヘラケズリ。	底部から口縁部方向への不規則なヘラミガキによる暗文がみとめられる。口縁部内面の器壁の剥落が著しい。	完形、淡褐色、床直 砂粒、輝石を含む普通
16-14	塊 6.5 11.3	口縁部は短く、わずかに外反する、胴部は球形を呈し、底部は丸底となる。	口縁部ヨコナデ、胴部から底部にかけてヨコ方向のヘラケズリの後ヘラミガキ。	底部から口縁部方向への放射状のヘラミガキによる暗文、口唇部及び口縁部内面の器壁の剥落が著しい。	完形、赤褐色、砂粒を若干含む床直普通
17-15	环 6.0 13.7	やや内消ぎみに外反しながら立ち上がる口縁部を有する。口縁部と胴部の境に棱を有し、その上をへラ状の工具によるナデにより沈線化をしている。底部は丸底を呈する。	口縁部ヨコナデ、胴部から底部にかけてヨコ方向のヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部から胴部にかけて不規則なヘラミガキによる暗文。	3/4、赤褐色、床直 小螺を含む普通
17-16	环 5.6 13.4	口縁部と胴部の境に棱を有する。口縁部は長く、直に立ち上がる。底部は丸底。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	口縁部から胴部にかけてヨコナデ。	完形、赤褐色、床直 砂粒を含む普通
17-17	环 5.6 13.4	口縁部と胴部の境に棱を有する。口縁部は長く、直に立ち上がる。底部は丸底。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	口縁部から胴部にかけてヨコナデ。	完形、赤褐色、床直 砂粒を含む普通
17-18	环 5.2 13.5	口縁部と胴部の境に棱を有する。口縁部は直に立ち上がり口唇部でわずかに外反する。底部は丸底。	口縁部ヨコナデ、胴部右→左へのヨコ方向、ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコナデの後、底部から口縁部方向のヘラミガキによる規則的な放射状暗文	完形、赤褐色、砂粒と小螺を含む床直普通
17-19	环 5.7 12.7	胴部と口縁部との境に棱を有する。その棱の上をヘラナデによって沈線を施してさらに棱を明瞭なものとしている。底部は丸底を呈する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコナデの後、底部から口縁部方向へのヘラミガキによる放射状暗文。口唇部の剥落が頗者。	完形、赤褐色、床直 砂粒を含む普通

捲回番号	器形	器形の特徴	調 整		備 考
			外 面	内 面	
17-20	16 5.0 12.8	胴部と口縁部との境にゆるやかな棱を有する。底部は比較的扁平。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコナデの後底部から口縁部方向へのヘラミガキによる放射状暗文。	完形、赤褐色、砂粒を含む普通
17-21	环 5.6 12.2	胴部と口縁部との境にゆるやかな棱を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコナデの後ヘラミガキによる暗文、口唇部器壁の荒れがみとめられる。	完形、赤褐色、砂粒を含む普通
17-22	16 5.2 13.5	胴部と口縁部との境に棱を有する、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部はヨコナデの後ヘラミガキ。	2/3、赤褐色、貯藏穴内砂粒を含む普通
17-23	环 4.8 14.2	所謂「内斜口縁」を有する。口唇部はわずかに立ち上がる底部は丸底を呈し、浅く皿状を成す。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラミガキが頗著。口縁部の器壁の剥落が目立つ。	完形、赤褐色、砂粒を含む普通
17-24	塊 5.4 11.6	底部から胴部は半球状を呈し、口唇部は内済する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラによるナデ	完形、赤褐色、砂粒を多く含む普通
17-25	塊 5.3 12.2	底部から胴部は半球状を呈し、口唇部は内済する。	口縁部ヨコナデ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、底部はヘラによるナデ。	完形、赤褐色、砂粒を多く含む普通
18-26	筒形土製品	平面形は長方形、断面形は上下につぶれた稍円形を呈する。	タテ方向のヘラケズリ。	接合帶を残し、その上に指痕压痕を明顯に残す。	F A 上 赤褐色、小礫を含む
18-27	筋 鋸 車	断面形は胴部とフクランミを有する台形状を呈する。	ヘラケズリ		上層 淡褐色、長石粒を含む普通
21-1	高 环 (底部)14.9	柱状部にふくらみをもち胴部は急に大きくひらく	柱状部はタテ方向のヘラミガキ、胴部はヨコナデの後、タテ方向のハケメ	柱状部はユビによるナデ、胴部はヨコ方向のハケメの後ヨコナデ	明暗のみ2/3、床直 淡褐色、小礫を含む普通
21-2	塊 5.8 11.6 3.5	所謂「内斜口縁」を有する。底部は小さくやや上げ底状を呈する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、器壁の荒れが目立つ	2/3、淡褐色、砂粒を含む普通
21-3	川	口縁部のみ残存。大きく外傾し口唇部近くに直に立ち上がり棱を形成する	口唇部ヨコナデ、口縁部はタテ方向のヘラミガキ。	口唇部ヨコナデ、口縁部はタテ方向のヘラミガキ。	口縁部のみ2/3、床直 淡褐色、砂粒を含む普通
21-4	高 环 7.2 18.7 3.1	環部のみ残存。環部下部には棱を有する。口縁部は大きく外傾し、口唇部で直に立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、胴部はタテ方向のヘラナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヨコ方向のヘラナデ。	環部のみ1/2、床直 赤褐色、小礫を含む普通

種類番号	器形	器形の特徴	調査		備考
			外面	内面	
27-1	甕 29.3 18.5 7.3	折り返し口縁を有する。口縁部は大きく外傾し、口唇部端は尖く棱を成す。胸部は中央部に最大径を有し、やや張る。	口縁部ヨコナデ、脇部は左上→右下方へのヘラナデ、脇部下部はタテ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、脇部はヨコ方向のヘラナデ。	1/2、 淡褐色、 砂粒を含む 普通
27-2	甕 26.1 15.6 7.8	單口縁を有する。口縁部は軽く外反する。胸部は上半部に最大径を有し、脇下部は直線的にすぼまり、底部に至る。	口縁部ヨコナデ、脇部ヨコナデ、脇部は右下→左上方へのヘラケズリの後、タテ方向のヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、脇部はヨコ方向のヘラナデ。	完形、 黒褐色、 砂粒を含む 普通
27-3	高 环 15.0	环部のみ残存。口縁部は直線的に開く。口唇部端に沈線を有する。	ヨコナデ	崩滅が著しい。	环部のみ完形、上層 赤褐色、 砂粒を含む ,
27-4	甕 23.8 12.1 6.5	單口縁を有する。口縁部はゆるやかに外反する。胸部はほぼ丸ん胴である	口縁部ヨコナデ、脇部にハケメ、脇部はタテ方向のヘラケズリ。	口縁部はハケメの後 ヨコナデ、脇部はハケメ。	完形、 赤褐色、 小環を含む 普通
27-5	小形 甕 18.8 12.2 4.7	單口縁を有する。口縁部はゆるやかに外反する。胸部は最大径を下部にもつ。	口縁部ヨコナデ、脇部はヘラケズリの後 ユビナデ。	口縁部はヨコナデ。	2/3、 淡褐色、 砂粒を含む 普通
28-6	甕 18.8	單口縁を有する。口縁部は外反し、口唇部でさらに外反度を強める。胸部は直線的に長く長脚化している。	口縁部ヨコナデ、脇部タテ方向のヘラケズリ。	口縁部はヨコナデ。脇部はタテ方向のヘラナデ。	1/5、 淡褐色、 砂粒を含む 普通
28-7	环 11.4 4.3	胸部と口縁部との境に棱を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、脇部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、脇部はヘラによるミガキ。	FA上 砂粒を含む 普通
28-8	环 7.9 16.7	胸部と口縁部との境に棱を有する。口縁部はやや内傾する。胸部は深い。	口縁部ヨコナデ、脇部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、脇部ヨコナデの後へ ラミガキによる放射状暗文。	1/2、 赤褐色、 砂粒を含む 普通
28-9	环 6.2 13.8	胸部と口縁部との境に棱を有する。口縁部は直立する。胸部は深く丸底を呈する。	口縁部ヨコナデ、脇部はヘラナデ。	口縁部ヨコナデ、 脇部はヘラナデの後 ヘラミガキによる放射状暗文。 口縁部に器壁の剥落 が著しい。	完形、 淡赤褐色、 砂粒を含む 普通
28-10	环 5.1 13.8	胸部と口縁部との境に棱を有する。口縁部はやや外傾する。	口縁部ヨコナデ、脇部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ。	1/2、 淡褐色、 砂粒を含む 普通
28-11	环 5.3 12.3	胸部と口縁部との境に棱を有する。口縁部は巾が広く直に立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、脇部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、脇部はヘラナデの後へ ラミガキによる放射状暗文。	2/3、 赤褐色、 砂粒を含む 普通

持田番号	器形	器形の特徴	調 整		備 考
			外 面	内 面	
28-12	环 5.6 13.5	胴部と口縁部との境に稜を有する。口縁部中広く直立する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラによるヨコ方向のナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラナデの後ヘラミガキによる放射状暗文。	2/3、赤褐色、床直小穂を含む普通
28-13	环 4.5 12.2	口縁部は内済しながらゆるやかに立ち上がり浅い皿状をなす。	ヨコ方向のヘラケズリの後ヨコ方向のヘラミガキ、底部はヘラケズリ。	ナデの後ヘラミガキによる放射状暗文	2/5、赤褐色、一括小穂を含む普通
28-14	环 4.5 13.1	胴部と口縁部との境に明瞭な稜を有する、口縁部はやや外傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラナデ。	口縁部ヨコナデ。	3/4、赤褐色、FA上砂粒を含む普通
28-15	环 3.9 12.5	胴部と口縁部との境に凸帶状に張り出す稜を有する。口縁部は直立する。体の器高は低い。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデの後ヘラミガキによる不規則な暗文。	2/3、褐色、FA上内面黒色普通
28-16	环 4.2 11.5	胴部と口縁部との境に凸帶状に張り出す稜を有する。口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデの後不規則なヘラミガキによる暗文。	2/3、暗褐色、FA上砂粒を含む普通内面黒色
28-17	环 4.6 13.3	胴部と口縁部との境に凸帶状に張り出す稜を有する。口縁部はやや内傾する、口唇部には平底部を作り出す。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデの後ヘラミガキ。	完形、黒褐色、FA上砂粒を含む普通
28-18	环 5.0 12.2	胴部と口縁部との境に凸帶状に張り出す稜を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラによるナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	1/2、淡褐色、FA上砂粒を含む普通
28-19	环 4.6 11.6	胴部と口縁部との境に凸帶状に張り出す稜を有する、口縁部は直立する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	完形赤褐色、FA上砂粒を含む普通内面黒色
28-20	环 5.5 12.6	胴部と口縁部との境に凸帶状に張り出す稜を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ヘラナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデの後ヘラミガキ。	2/3、淡褐色、FA上砂粒を含む普通
28-21	环 5.1 12.8	胴部と口縁部との境に凸帶状に張り出す稜を有する。口縁部はやや内傾する。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデの後ヘラミガキ。	3/5、淡褐色、FA上砂粒を含む普通
28-22	甕 7.6	胴下半部と底部のみ残存底部は平底に木葉痕をのこす。	タテ方向のハケメ、底部周辺はヘラナデ。	ヨコ方向のハケメ	胴部のみ1/3上層淡褐色、砂粒を含む普通
29-23	甕 28.0 21.6 17.8	胴部はゆるやかな「砲弾状」を呈する。口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ、胴部は右下→左上方向のヘラケズリの後ヘラナデ、底部はヘラケズリ。	口縁部はヨコナデのち、胴部下からのヘラミガキ、胴部はヘラミガキ。	完形、淡褐色、床直砂粒を少含む普通

捕獲番号	器形	器形の特徴	調 整		備 考	
			外 面	内 面		
29-24	堆 9.8	直立する口縁部をもつ。 口縁部の器壁はそぎ落としたように徐々に薄くなる。	ヨコナデの後、ヘラ ミガキによる不規則な暗文。	ヨコナデ。	口縁部のみ 褐色 普通	F A上
29-25	鉢 8.1 9.8 28	小さな底部からゆるやかに内湾する胴部を有し、 口縁部は内面に棱を有し外反する。	口縁部へラナデ、胴 部から底部にかけて ヘラナデ。	口縁部へラナデ、胴 部から底部にかけて ヘラナデの後ヘラミ ガキ。	% 赤褐色 普通	床直
29-26	甕 17.1	胴部はかなり肩の張る器 形である。口縁部は頸部 から「くの字」に外反し 段を有する。口縁部内面 にも段を有する。	口縁部ヨコナデ、肩 部ナデ。	口縁部ヨコナデ、肩 部へラナデ。 器壁の剥落が顕著。	胴下半欠損 淡褐色 砂粒を含む 普通	床直
29-27	甕 32.6 17.0 5.0	胴部は中央部に最大径を 有し、長軸化をしている 底部は小さく、口縁部は ゆるやかに外反する。	口縁部ヨコナデ、胴 部はタテ方向のヘラ ケズリ。 器壁の剥落が顕著。	口縁部ヨコナデ、胴 部はナデ。 器壁の剥落が顕著。	% 淡褐色 砂粒を含む 普通 2次焼成がみとめられる	F A上
33-1	环 4.7 10.6	口縁部と胴部の境に凸凹 状に張り出す棱を有する。 口縁部は内湾ぎみに立ち 上がる。	口縁部ヨコナデ、底 部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底 部へラミガキ。	% 黒褐色 砂粒を含む 普通	床直
33-2	环 13.2	口縁部と胴部の境に凸凹 状に張り出す棱を有する。 口縁部は内傾す。	口縁部ヨコナデ、底 部はヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ、底 部へラナデ。	% 淡褐色 砂粒を含む 普通	上層 砂粒を含む 普通
33-3	手捏ね土器 4.3 5.0 4.5	环形のもので底部は厚く 口縁部は手でつまみあげ られてつくられている。	指頭圧痕	指頭圧痕	完形 淡褐色	床直 砂粒を含む 普通
33-4	手捏ね土器 4.2 3.9	环形のもので、底部は厚 い。	指頭圧痕	指頭圧痕	% 淡褐色 砂粒を含む 普通	床直
33-5	高 环 11. 4	脚部のみである。脚柱部 下部にふくらみをもつ。 裾部は内湾ぎみに大きく 開く。	脚柱部タテ方向のヘ ラミガキ、脚部はヨ コナデの後ヘラミガ キによる暗文。	ヨコナデ	脚部のみ % 赤褐色 普通	床直
33-6	筒形土製品	平面形は長方形、断面形 はつぶれた桔円形を呈す る。一端はつぶされてい る。	タテ方向のヘラケズ リ。	輪積痕と指頭の圧痕 を明瞭に残す。	床直 淡褐色 砂粒を含む 普通 一端に黒斑がみとめられる	
33-7	筒形土製品	平面形は長方形、断面形 はつぶれた桔円形を呈す る。	タテ方向のヘラケズ リ、一端部に指頭圧 痕。	輪積痕と指頭の圧痕 を明瞭に残す。	床直 淡褐色 砂粒を含む 普通 一端に黒斑がみとめられる	
34-8	筒形土製品	平面形は長方形、断面形 はつぶれた桔円形を呈す る。両端は上下からつぶ されている。	タテ方向のヘラケズ リ、端部に指頭圧痕	輪積痕と指頭の圧痕 を明瞭に残す。	ほぼ完形 淡褐色 砂粒を含む 普通 一面全体には黒斑	床直
38-1	环 4.8 11.4	胴部と口縁部との境に凸 凹状に張り出す棱を有す る。口縁部は棱より内傾 ぎみに立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、胴 部は荒いヘラケズリ	口縁部から胴部ヨコ ナデ。	% 黒褐色 石英粒を含む 普通	床直

捕獲番号	器 形	器 形 の 特 徴	調 整		備 考
			外 面	内 面	
41-1	甕 17.5	口縁部は「くの字」に外反する。	口縁部は荒いハケメの後ヨコナダ、胴部は荒いハケメの後ヘラナダ。	口縁部ヨコナダ、胴部ヘラナダ。	胴上半部のみ 貯藏穴内 淡褐色 砂粒を含む 普通 口縁部に塗彩か
41-2	小形 甕 7.4	口縁部は欠損しているが胴部からゆるやかに外反するものと思われる。底部はやや丸底風にしあげられている。	口縁部タテ方向のハケメの後ヨコナダ。胴部はタテ方向のハケメの後ヘラナダ。	口縁部ヨコナダ。	% 淡褐色 床直 砂粒を含む 普通
41-3	鉢 9.5 11.9 6.4	底部からゆるやかに内湾しながら胴部は立ち上がり口縁部に至る。	ヘラケズリの後ヘラナダ。	ヘラナダ。	% 淡褐色 かくせん石を多く含む 普通
41-4	小形 甕 12.7 12.6 7.2	口縁部は「くの字」に外反する。胴部は比較的大きな底部から珠形に張る。	口縁部ヨコナダ 胴部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナダ 胴部ヘラナダ	完形 淡褐色 床直 砂粒を含む 普通
41-5	鉢 9.5 10.2 3.95	底部からゆるやかに内湾しながら胴部は立ち上がり口縁部に至る。口唇端部をほとんど欠損している。	細かいヘラミガキ。	口縁部ヨコナダ 胴部はタテ方向のヘラミガキ。	完形 赤褐色 床直 普通
41-6	壺 4.7	頭部から口縁部にかけて欠損、胴部はかなり大きく張り、つぶれた球形をなす。	頭部にヨコナダ 胴部はタテ方向のハケメの後ヘラナダ。 表面の剥落が顕著。	ヘラナダ。	% 赤褐色 床直 普通
41-7	高 环	脚部のみである。脚柱部は下部にふくらみを有し、胴部は大きくラッパ状に開く、脚部端はやや内湾する。	脚柱部はヨコナダの後タテ方向のヘラミガキ、胴部はヨコナダの後ヘラミガキ。	胴部はヨコナダ。	% 赤褐色 床直 砂粒を含む 普通
41-8	高 环 12.6	脚部のみである。脚柱部は直線的にひらく、胴部は大きく、ラッパ状に開く。	脚柱部タテ方向のヘラミガキ、胴部はヨコ方向のヘラミガキ。	脚柱部タテ方向のヘラケズリ、胴部はヨコナダ。	脚部のみ % 赤褐色 床直 普通
41-9	环 4.4 13.1	脚部と口縁部の境に棱を有する。口縁部は後より外傾する。	口縁部ヨコナダ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナダ 胴部ヘラナダ	完形 淡赤褐色 一括 砂粒を含む 普通
41-10	小形 甕 9.8 9.1 5.0	口縁部は外反し、胴部は「そろばん玉」状を呈する。頭部に接合帯のおさえ痕有り。	口縁部ヨコナダ 胴部ヘラナダ	口縁部ヨコナダ 胴部ヘラナダ	完形 淡褐色 一括 砂粒を含む 普通
42-11	壺 6.8 12.3	半球状の胴部からゆるやかに内湾しながら立ちあがり口縁部に至る。	口縁部ヨコナダ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナダ 胴部ヘラナダ 内面底部の器壁の荒れがめだつ。	% 暗褐色 貯藏穴 砂粒及びFP粒 を含む 普通
42-12	壺 6.4	半球状の胴部からゆるやかに内湾しながら立ちあがり口縁部に至る。	口縁部ヨコナダ 胴部ヘラケズリ 底部周辺の器壁の剥落が目立つ。		% 赤褐色 床直 砂粒を含む 普通

標印番号	器形	器形の特徴	調 整		備 考
			外 面	内 面	
42-13	环 5.1 12.6	丸底の底部からゆるやかに外反した胴部は口縁部でわずかに後をつくり内湾ざいに立ちあがる。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリの後 ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	完形 淡褐色 床直 普通
42-14	环 3.9 8.5 2.8	底部は丸底に近い平底を有する。口縁部はゆるやかな棱を有しやや内凹する。	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラケズリの後ヨコナデ 底部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はヨコナデの後タテ方向のヘラミガキ。	完形 淡褐色 貯藏穴 普通
42-15	环 5.2 12.7	口縁部と胴部の境に棱をする。口縁部は後より直立する。口縁内面はややふくらみを有する。	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はヨコナデの後ヘラミガキによる放射状暗文。一部に器壁の剥落が目立つ。	完形 赤褐色 一括 普通
42-16	杯 5.4 13.2	口縁部と胴部との境に明瞭な棱を有する、口縁部は後より直立する。器壁は比較的うすく均一になっている。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ナナ 後周辺に器壁の剥落が顕著。	完形 赤褐色 床直 小螺を含む 普通
42-17	环 6.6 14.15	口縁部と胴部との境に明瞭な棱を有する、口縁部は後より直立する。口唇端部は洗線が施される。	口縁部ヨコナデ 器壁の荒れが目立つ	口縁部ヨコナデ 後縫脛辺の器壁の荒れが顕著。	完形 赤褐色 床直 砂粒を含む 普通
42-18	环 5.5 13.4	口縁部と胴部との境に明瞭な棱を有する口縁部は後より直立する。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ 口縁部及び胴部の器壁の荒れが顕著。	完形 赤褐色 床直 砂粒を含む 普通
42-19	环 12.7 6.2	口縁部と胴部との境に明瞭な棱を有する、口縁部は後よりやや外傾ぎみに立ち上がる。口唇端部には面とりがなされている。	口縁部ヨコナデ 器壁の荒れが顕著。	口縁部ヨコナデ 胴部ナナ	完形 淡褐色 床直 砂粒を含む 普通
42-20	环 (15.4)	口縁部と胴部との境にゆるやかな棱を有する、口縁部は端部でやや外反する。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ナナの後、タテ方向のヘラミガキによる不規則な放射状暗文。	完形 赤褐色 床直 小螺を含む 普通 一部に黒斑
42-21	环 6.7 15.4	所謂「内斜口縁」を有する。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	完形 赤褐色 床直 小螺を含む 普通
42-22	环	口縁部と胴部との境に明瞭な棱を有する口縁部は後よりやや外傾ぎみに立ち上がる。口縁部は幅広く、胴部も深い。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリの後 ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ 胴部はナナの後ヨコ方向のヘラミガキ	完形 灰褐色 床直 角せん石を多く含む 普通
42-23	环 6.4	口縁部と胴部との境に明瞭な棱を有する口縁部は後よりやや内傾ぎみに立ち上がる。	口縁部ヨコナデ 胴部へラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はナナ	完形 灰褐色 床直 角せん石を多く含む 普通

捕獲番号	器 形	器 形 の 特 徴	調 整		備 考
			外 面	内 面	
42-24	环 5.50 13.0	口縁部と胴部との境に明瞭な棱を有する。口縁部は棱より直立する。口唇端部には沈線が施される。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリの後 ヘラナデ。	口縁部ヨコナデ 胴部ナデ	完形 赤褐色 砂粒を含む 普通
42-25	环 2.75 8.4	口縁部と胴部との境に凸帶状に張り出す棱を有する。器高は低く非常に浅い。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリの後 …部にヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 胴部ナデの後ヘラミ ガキ。	% 淡褐色 普通 黒斑がみとめられる。
42-26	环 4.5 11.2	口縁部と胴部との境に凸帶状に張り出す棱を有する。口縁部は棱より内傾ぎみに立ち上がる。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラミガキ	% 黒褐色 普通
42-27	环 5.2 11.4	口縁部と胴部との境に凸帶状に張り出す棱を有する。口縁部は棱より内傾ぎみに立ち上がる。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 底部を除く全面にススの付着がみられる	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデの後タ チ方向へのヘラミガキ。	% 淡褐色 普通
47-1	甕 22.4	口縁部は胴部よりわずかに屈曲を有し、直立ぎみに立ち上がり、口唇端部でわずかに外反する。胴部は下位に最大径を有しやや下彫れである。	口縁部ヨコナデ 胴部は上から下にかけてのヘラケズリが顯著である。 胴部下端には器壁の荒れが顯著である。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデか。	% 淡褐色 砂粒を含む 普通
47-2	甕 36.2 20.0 5.0	口縁部は胴部より「くの字」に大きく外反する。胴部は長胴化し底みは少ない。	口縁部ヨコナデ 胴部上半は、下から上にかけてのタテ方向のヘラケズリ下半 は下から上にかけてのナナメ方向のヘラケズリが顯著。	口縁部ヨコナデ 胴部ヨコ方向のヘラ ナデ。	完形 淡褐色 カマド内 砂粒を多く含む 普通
48-3	瓶 24.7 22.25 8.3	口縁部は大きく外反する。胴部は中央部に最大径を有する。	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラケズリの 後下から上にかけて のヘラナデか。	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラナデの後 ちタテ方向のヘラミ ガキ。	完形 赤褐色 外面方に黒斑
48-4	瓶	口縁部を欠失している。注口部は未成穿孔である。又注口のまわりには小さな割れがみとめられる。胴部は丸底を呈する。	頸部ヨコナデ 胴部はヘラケズリの 後ヨコ方向のヘラミ ガキ。	胴部はヨコ方向のヘ ラミガキ。	胴部のみ突形 淡褐色 砂粒を含む 普通
48-5	手捏ね土器 3.9 4.8 4.7	环形のもので底部は厚く口縁部はつまみあげによつて作り出されている。	手捏ね痕	ユビナデ	% 淡褐色 砂粒を含む 普通
48-6	小 形 瓶 17.7 16.6 6.0	口縁はゆるやかに外反する。胴部は下位に最大径を有しやや下彫れである	口縁部ヨコナデ 胴部はタテ方向のヘ ラケズリ 底部もヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラナデ	% 淡褐色 砂粒を多く含む もうい
48-7	钵 11.6 11.7 5.6	平底の底部からゆるやかに内済しながら立ち上がり口縁部に至る。口縁部はヨコナデによって表現されている。又口縁内面にはわざかに棱を有する	口縁部ヨコナデ 胴部右下→左上方 のナナメ方向のヘ ラケズリ。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ、一部 にミガキもみとめら れる。 暗褐色を一面に呈す る。	完形 淡褐色 砂粒を含む 普通
					外面に一部黒斑

種別番号	器種	器形の特徴	調査		備考
			外面	内面	
48-8	环 5.4 10.0	口縁部と副部との境にわずかに棱を有する。副部は比較的深い。	口縁部ヨコナデ 副部ヨコ方向のヘラケズリ。	口縁部ヨコナデ 副部はヘラミガキ。	% 淡褐色 床直 普通
48-9	环 4.7 12.9	口縁部と副部との境に凸带状に張り出す棱を有する。口縁部は後より内傾ぎみに立ちあがる。口唇端部には沈線が施されている。	口縁部ヨコナデ 副部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 副部はヨコナデの後ヘラミガキ。	完形 黒褐色 床直 普通
48-10	环 4.1 12.1	口縁部と副部との境に凸带状に張り出す棱を有する。口縁部は後より内傾ぎみに立ちあがる。口唇端部には沈線が施されている。	口縁部ヨコナデ 副部ヘラケズリ、一部にヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ 副部はナデの後ヘラミガキ。	完形 黒褐色 床直 普通
48-11	环 4.9 11.9	口縁部と副部との境に凸带状に張り出す棱を有する。口縁部は後より内傾ぎみに立ちあがる。口唇端部には沈線が施している。	口縁部ヨコナデ 副部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 副部はナデの後ヘラミガキ。	完形 黒褐色 砂粒を含む 床直 普通
48-12	环 5.1 12.8	口縁部と副部との境に凸带状に張り出す棱を有する。口縁部は後より内傾ぎみに立ちあがり口唇端部では外反する。	口縁部ヨコナデ 副部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 副部はナデの後ヘラミガキ。	完形 黒褐色 床直 普通
48-13	环 4.3 11.8	口縁部と副部との境に凸带状に張り出す棱を有する。口縁部は後より内傾ぎみに立ちあがる。	口縁部ヨコナデ 副部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 副部ヘラナデの後ヘラミガキ。	% 赤褐色 床直 普通
48-14	环 4.9 14.4	口縁部と副部との境に凸带状に張り出す棱を有する。口縁部は後より外傾する。	口縁部ヨコナデ 副部はヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 副部はヘラナデの後ヘラミガキ。	完形 黒褐色 貯藏穴 普通
48-15	环 5.1 13.0	口縁部と副部との境に棱を有する。口縁部は棱より外傾する。	口縁部ヨコナデ 副部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 副部はヘラナデの後ヘラミガキ。 底部のみ黒色。	完形 淡褐色 床直 砂粒を含む 普通
48-16	环 5.0 13.1	口縁部と副部との境に棱を有する。口縁部は棱より大きく外反する。	口縁部ヨコナデ 副部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 副部もヨコナデ。	完形 淡褐色 床直 砂粒を含む 普通
48-17	环 4.9 13.3	口縁部と副部との境に棱を有する。口縁部は棱より外反する。	口縁部ヨコナデ 副部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 副部もヨコナデ	% 淡褐色 床直 普通
50-1	小形 瓢 19.5 12.9 5.8	口縁部は頸部より「くの字」に外反する。又口唇端部は肥厚する。副部は上半部に最大径を有する。器厚は不均一であり全体にゴツゴツしている。	口縁部端ヨコナデ 頸部はタテのヘラナデ	口縁部ヨコナデ 副部ヘラナデ	% 赤褐色 床直 砂粒を含む 普通

拂図番号	器 形	器 形 の 特 徴	調 整		備 考
			外 面	内 面	
50-2	脚付 坯 (10.4) 17.8	脚部を欠失している。口 縁部は外反する、胴部は 中央に最大径を有する。	口縁部ヨコナデ 胴部はヨコ方向のヘ ラミガキ	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラミガキ。	% 淡褐色 普通
50-3	高 坯 (6.8) 19.2	脚部を欠失、坯部の下端 とは枝を有する。口縁部 は直線的に立ち上がる。	口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 胴部はヘラナデの後 ヘラミガキ	% 赤褐色 砂粒を含む 普通